

概

I

況

I

概

況

1 オホーツク総合振興局管内の概要

(1)位置、面積、気候

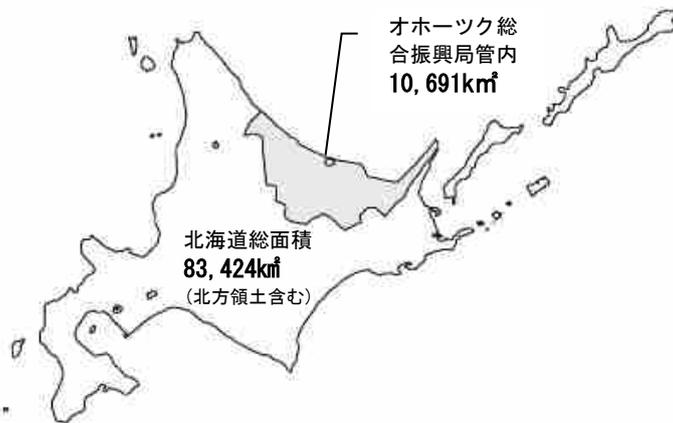
オホーツク地域（総合振興局管内）は、北海道の北東部に位置し、オホーツク海と約280kmの海岸線で接しています。総面積は、約10,691km²と全道面積の12.8%を占め、岐阜県を上回る広さに約31万人が暮らしています。

気候は冬期間の寒さは厳しいものの、比較的穏やかで、年間降雨量も800ミリ前後と少なく、日照時間にも恵まれています。また、1月下旬から3月にかけて、海面が流氷に覆われるという、オホーツク海特有で他の地域には見られない特色があるほか、原始的な自然がそのまま残されている知床国立公園や網走国立公園など、豊かな自然資源に恵まれています。



流氷に覆われた海

位置及び面積



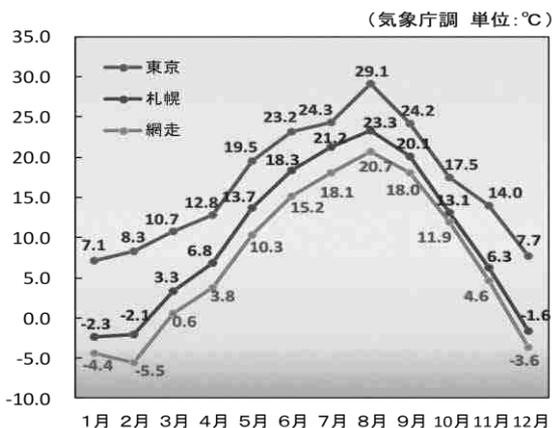
管内と他県の面積比較

順位	県名	面積(km ²)
1	岩手県	15,275
2	福島県	13,784
3	長野県	13,562
4	新潟県	12,584
5	秋田県	11,638
	オホーツク管内	10,691
6	岐阜県	10,621
7	青森県	9,646
8	鹿児島県	9,187
9	広島県	8,480
10	兵庫県	8,401

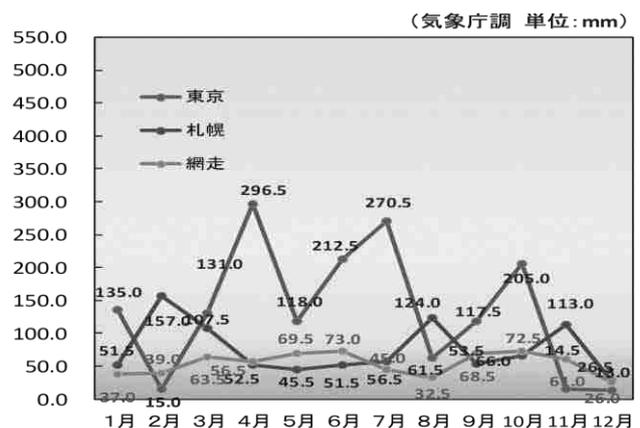
(R2.10.1現在 国土院調)
ただし、県の面積地には、県の境界にまたがって境界未定となっている市区町村等の面積地を含まない

気候

■月別平均気温（令和2年）



■月別降水量（令和2年）

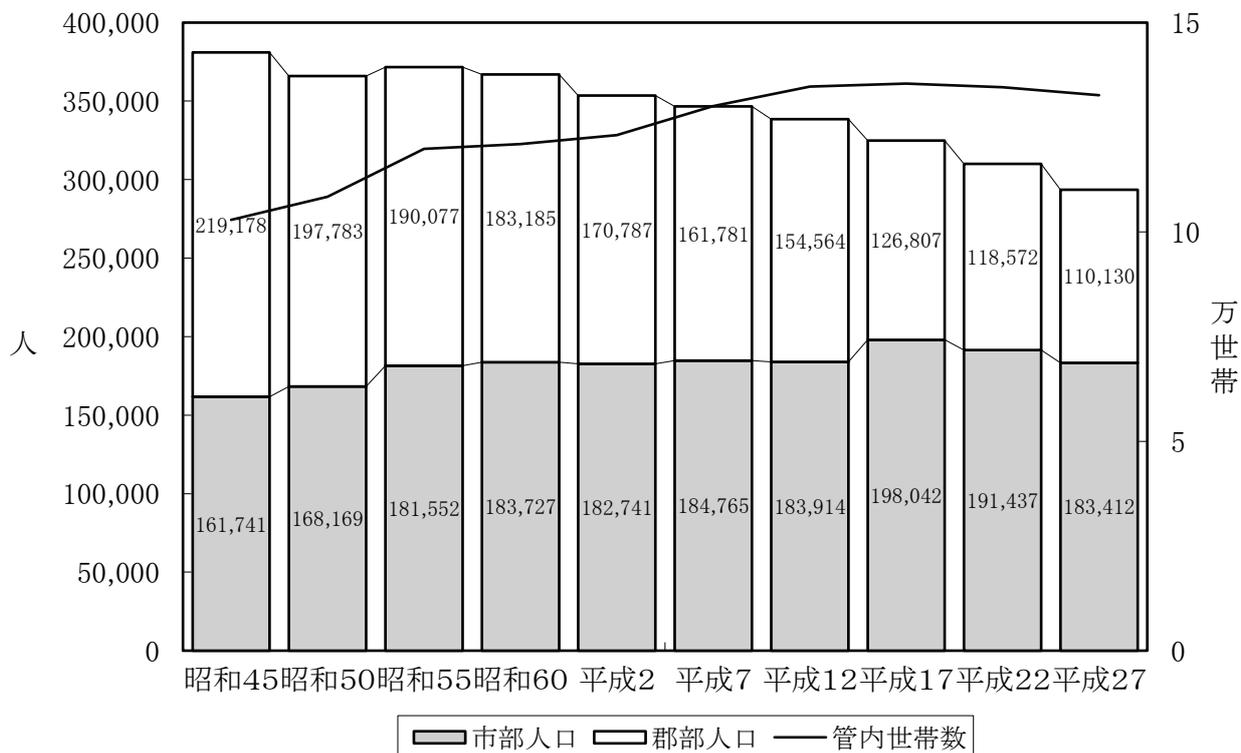


(2) 人 口

管内の人口は、約29.3万人で全道総人口の5.5%を占めていますが、昭和35年をピークに減少傾向を示しており、特に郡部における減少が著しくなっています。

国勢調査人口・世帯数の推移

調査年(国勢調査回)	管内人口	市部人口	郡部人口	管内世帯数	全道比(%)	
					人口	世帯数
大正9年(第1回国調)	202,164	70,786	131,378	39,264	8.6	8.7
〃 14年(第2回 〃)	212,689	68,535	144,154	39,600	8.5	8.4
昭和5年(第3回 〃)	241,057	78,714	162,343	42,531	8.6	8.3
〃 10年(第4回 〃)	275,177	92,500	182,677	46,860	9.0	8.6
〃 15年(第5回 〃)	293,229	98,805	194,424	48,927	9.0	8.4
〃 22年(第6回 〃)	347,078	109,164	237,914	61,112	9.0	8.5
〃 25年(第7回 〃)	380,401	124,320	256,081	66,615	8.9	8.4
〃 30年(第8回 〃)	415,031	139,960	275,071	74,787	8.7	8.3
〃 35年(第9回 〃)	425,126	151,265	273,861	87,049	8.4	7.3
〃 40年(第10回 〃)	410,204	159,425	250,779	97,247	7.9	7.7
〃 45年(第11回 〃)	380,919	161,741	219,178	102,887	7.3	6.7
〃 50年(第12回 〃)	365,952	168,169	197,783	108,385	6.9	6.5
〃 55年(第13回 〃)	371,629	181,552	190,077	119,845	6.7	6.5
〃 60年(第14回 〃)	366,912	183,727	183,185	120,981	6.5	6.3
平成2年(第15回 〃)	353,528	182,741	170,787	123,131	6.3	6.1
〃 7年(第16回 〃)	346,546	184,765	161,781	130,074	6.1	5.9
〃 12年(第17回 〃)	338,478	183,914	154,564	134,746	6.0	5.8
〃 17年(第18回 〃)	324,849	198,042	126,807	135,437	5.8	5.7
〃 22年(第19回 〃)	310,009	191,437	118,572	134,538	5.6	5.5
〃 27年(第20回 〃)	293,542	183,412	110,130	132,625	5.5	5.4



(3) 沿革

- 1869年(明治2年) 開拓使設置、蝦夷地を北海道と改称、11国86郡を置く。この地方は北見国網走・斜里・常呂・紋別の4郡となる。
- 1872年(明治5年) 全道を6部に区分し札幌に本庁、函館など5ヶ所に支庁を置く。4郡は根室支庁の管轄に属する。
- 1873年(明治6年) 網走に根室支庁出張所を設置。
- 1880年(明治13年) 網走・斜里・常呂・紋別郡役所が網走に設置される。
- 1881年(明治14年) 釧路国網尻郡を北見国網走郡に合併。
- 1882年(明治15年) 開拓使を廃止、函館・札幌・根室の3県を置く。4郡は根室県に属する。
- 1886年(明治19年) 3県1局を廃止し、北海道庁を設置。函館・根室に支庁を置く。網走郡役所は従来通り4郡を管轄する。
- 1897年(明治30年) 北海道区制、一級町村、二級町村制公布。郡役所を廃止し19支庁を置く。この地方に網走支庁が設置される。
- 1910年(明治43年) 鉄道開通に伴い交通事情が改善されたことから、支庁の一部統廃合により14支庁体制が形成される。
- 1923年(大正12年) 戸長役場を全廃し、町村制が施行される。(市6、一級町村99、二級町村155)
- 1947年(昭和22年) 地方自治法施行。地方公共団体「北海道」となる。
- 1948年(昭和23年) 北海道支庁設置条例施行に伴う14支庁体制となる。
- 1956年(昭和31年) 相内村が北見市に編入。佐呂間町、若狭村が合併し、佐呂間町を設置。
- 1961年(昭和36年) 端野村が町制を施行。
- 2005年(平成17年) 生田原町、遠軽町、丸瀬布町、白滝村が合併し、遠軽町を設置。
- 2006年(平成18年) 北見市、端野町、留辺蘂町、常呂町が合併し、北見市を設置。東藻琴村、女満別町が合併し、大空町を設置。
- 2009年(平成21年) 上湧別町、湧別町が合併し、湧別町を設置。3市14町1村体制となる。
- 2010年(平成22年) 北海道総合振興局及び振興局の設置に関する条例施行に伴い、オホーツク総合振興局を設置。

2 市町村等の所在地等

(市町村)

(令和3年1月1日現在)

市町村名	地方 公共団体 コード	所在地	郵便番号	電話番号	FAX番号	総合支所・ 支所・出張所
北見市	012084	北見市大通西3丁目1番地1	090-8501	(0157) 23-7111	(0157) 61-7400	(総)端野・常呂・ 留辺蘂 (支)相内・温根湯 温泉 (出)上常呂・仁頃・ 東相内・日吉・ 瑞穂
網走市	012114	網走市南6条東4丁目1番地	093-8555	(0152) 44-6111	(0152) 43-5404	
紋別市	012190	紋別市幸町2丁目1番18号	094-8707	(0158) 24-2111	(0158) 24-6925	(支)上渚滑 (出)渚滑
美幌町	015431	美幌町字東2条北2丁目25番地	092-8650	(0152) 73-1111	(0152) 72-4869	
津別町	015440	津別町字幸町41番地	092-0292	(0152) 76-2151	(0152) 76-2976	
斜里町	015458	斜里町本町12番地	099-4192	(0152) 23-3131	(0152) 23-4150	(支)ウトロ
清里町	015466	清里町羽衣町13番地	099-4492	(0152) 25-2131	(0152) 25-3571	(支)札弦町・緑町
小清水町	015474	小清水町元町2丁目1番1号	099-3698	(0152) 62-2311	(0152) 62-4198	
訓子府町	015491	訓子府町東町398番地	099-1498	(0157) 47-2112	(0157) 47-2600	
置戸町	015504	置戸町字置戸181番地	099-1100	(0157) 52-3311	(0157) 52-3353	
佐呂間町	015521	佐呂間町字永代町3番地の1	093-0592	(01587) 2-1211	(01587) 2-3368	(支)若佐 (出)浜佐呂間
遠軽町	015555	遠軽町1条通北3丁目1番地1	099-0492	(0158) 42-4811	(0158) 42-3688	(総)生田原・丸瀬布・ 白滝 (出)安国
湧別町	015598	湧別町上湧別屯田市街地318番地	099-6592	(01586) 2-2111	(01586) 2-2511	(総)湧別 (出)中湧別・芭露
滝上町	015601	滝上町字滝ノ上市街地4条通2丁目1番地	099-5692	(0158) 29-2111	(0158) 29-3588	
興部町	015610	興部町字興部710番地	098-1692	(0158) 82-2131	(0158) 82-2990	(出)沙留
西興部村	015628	西興部村字西興部100番地	098-1501	(0158) 87-2111	(0158) 87-2777	
雄武町	015636	雄武町字雄武700番地	098-1792	(0158) 84-2121	(0158) 84-2844	
大空町	015644	大空町女満別西3条4丁目1番地1	099-2392	(0152) 74-2111	(0152) 74-2191	(総)東藻琴

(一部事務組合)

(令和3年1月1日現在)

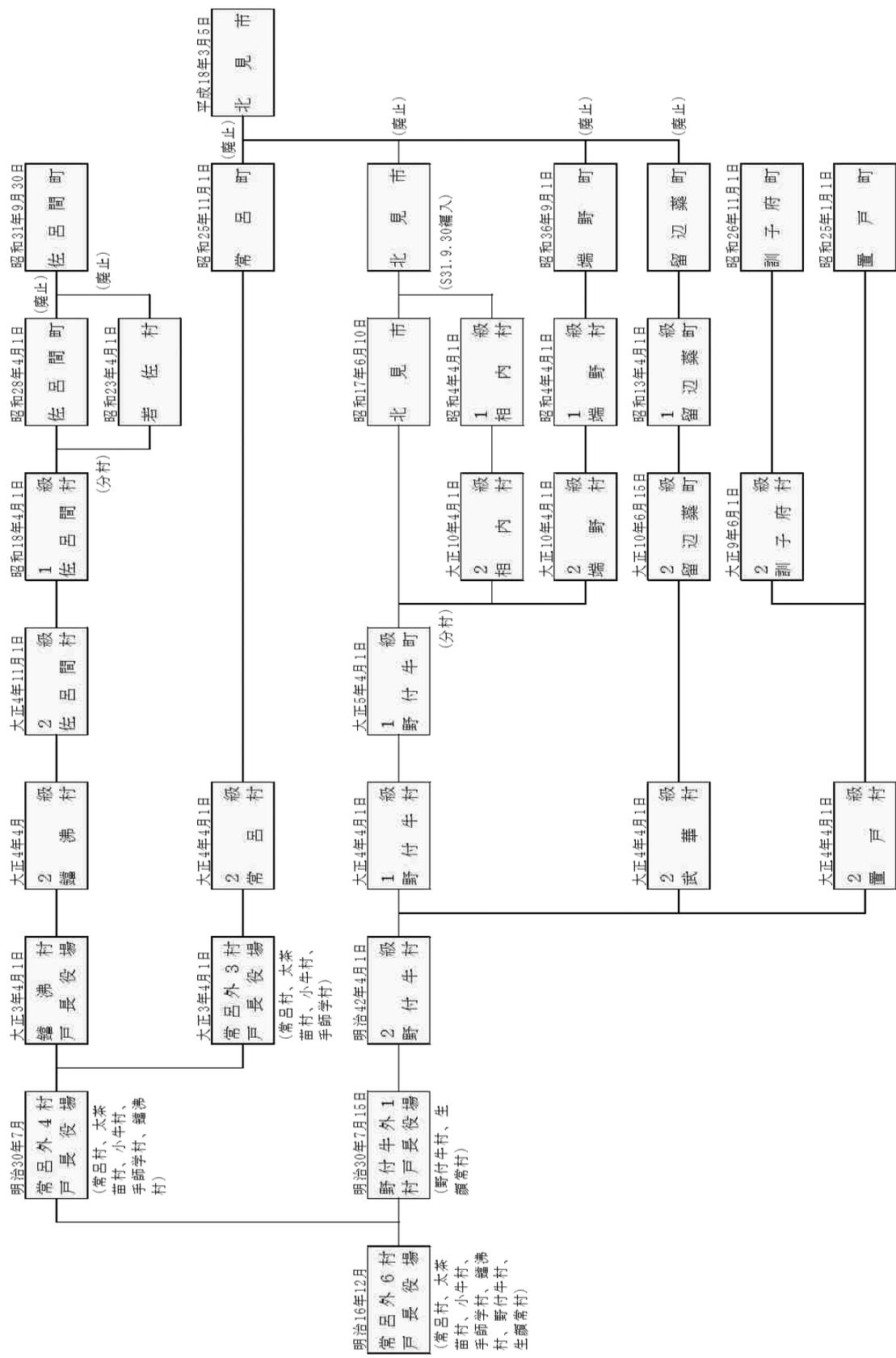
一部事務組合名	地方 公共団体 コード	所在地	郵便番号	電話番号	FAX番号
斜里郡3町終末処理事業組合	018732	斜里町字大栄144番地	099-4144	(0152) 23-1069	(0152) 23-1069
遠軽地区広域組合	019194	遠軽町1条通北3丁目1番地1	099-0492	(0158) 42-7600	(0158) 42-2184
美幌・津別広域事務組合	019208	美幌町字栄町1丁目4番地	092-0012	(0152) 73-1211	(0152) 72-0664
網走地区消防組合	019216	網走市南2条西4丁目2番地	093-0012	(0152) 43-2221	(0152) 45-1119
網走地方教育研修センター組合	019224	網走市駒場北4丁目2番1号	093-0033	(0152) 43-2917	(0152) 43-2917
北見地区消防組合	019259	北見市寿町2丁目1番28号	090-0065	(0157) 25-1515	(0157) 25-8155
斜里地区消防組合	019381	斜里町本町14番地3	099-4113	(0152) 23-3647	(0152) 23-2494
紋別地区消防組合	019488	紋別市幸町2丁目1番18号	094-8707	(0158) 23-0119	(0158) 24-3632
西紋別地区環境衛生施設組合	019755	興部町字秋里9番4	098-1621	(0158) 82-2924	(0158) 82-2925
広域紋別病院企業団	019844	紋別市緑町5丁目6番8号	094-0014	(0158) 24-3111	(0158) 24-3111

オホーツク町村会		網走市北7条西3丁目	093-8585	(0152) 44-6472	(0152) 44-5454
オホーツク町村議会議長会		網走市北7条西3丁目	093-8585	(0152) 44-6472	(0152) 44-5454
北海道庁		札幌市中央区北3条西6丁目	060-8588	(011) 231-4111	
オホーツク総合振興局		網走市北7条西3丁目	093-8585	(0152) 41-0603	

3 面積及び人口

市町村名	面積(k㎡) 令和2年 10月1日 国土地理院	人口密度 (H27国調) (人/k㎡)	人 口						令和3年 1月1日 日本帳 台	
			国 勢 調 査					差 引 H27-H22		増 減 率 (%)
			H27	H22	H17					
北見市	1,427.41	68.6	121,226	125,689	129,365	△4,463	△ 3.6	115,435		
(旧北見市)	—	—	—	—	110,715	—	—			
(旧端野町)	—	—	—	—	5,469	—	—			
(旧留辺蘂町)	—	—	—	—	8,400	—	—	—		
(旧常呂町)	—	—	—	—	4,781	—	—	—		
網走市	471.00	83.0	39,077	40,998	42,045	△1,921	△ 4.7	34,640		
紋別市	830.67	27.8	23,109	24,750	26,632	△1,641	△ 6.6	21,317		
美幌町	438.41	46.3	20,296	21,575	22,819	△1,279	△ 5.9	18,941		
津別町	716.80	7.0	5,008	5,646	6,222	△ 638	△11.3	4,485		
斜里町	737.13	16.6	12,231	13,045	13,431	△ 814	△ 6.2	11,300		
清里町	402.76	10.5	4,221	4,551	5,025	△ 330	△ 7.3	3,951		
小清水町	286.89	17.7	5,085	5,358	5,753	△ 273	△ 5.1	4,676		
訓子府町	190.95	26.7	5,100	5,435	5,981	△ 335	△ 6.2	4,810		
置戸町	527.27	5.9	3,092	3,428	3,699	△ 336	△ 9.8	2,765		
佐呂間町	404.94	13.2	5,362	5,892	6,393	△ 530	△ 9.0	4,955		
遠軽町	1,332.45	15.7	20,873	22,265	23,648	△1,392	△ 6.3	19,358		
(旧生田原町)	—	—	—	—	—	—	—	—		
(旧遠軽町)	—	—	—	—	—	—	—	—		
(旧丸瀬布町)	—	—	—	—	—	—	—	—		
(旧白滝村)	—	—	—	—	—	—	—	—		
湧別町	505.79	18.3	9,231	10,041	10,758	△ 810	△ 8.1	8,469		
(旧上湧別町)	—	—	—	—	5,841	—	—			
(旧湧別町)	—	—	—	—	4,917	—	—			
滝上町	766.89	3.5	2,721	3,028	3,366	△ 307	△10.1	2,479		
興部町	362.54	10.8	3,909	4,301	4,589	△ 392	△ 9.1	3,755		
西興部村	308.08	3.6	1,116	1,135	1,224	△ 19	△ 1.7	1,058		
雄武町	636.89	7.1	4,525	4,939	5,507	△ 414	△ 8.4	4,339		
大空町	343.66	31.7	7,360	7,933	8,392	△ 573	△ 7.2	6,963		
(旧東藻琴村)	—	—	—	—	2,677	—	—	—		
(旧女満別町)	—	—	—	—	5,715	—	—	—		
合計	10,690.53	29.0	293,542	310,009	324,849	△16,467	△ 5.3	273,696		

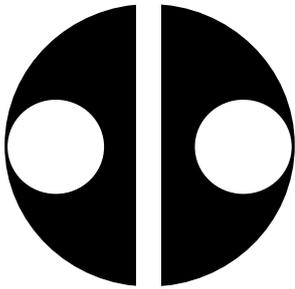
市町村名	世帯数						産業別就業者人口(平成27年国勢調査)					
	国勢調査					令和2年 1月1日 住民基本 台帳	第1次産業		第2次産業		第3次産業	
	H27	H22	H17	差引 H27-H22	増減率 (%)		就業者 人口	比率	就業者 人口	比率	就業者 人口	比率
北見市	56,202	56,012	55,335	190	0.3	61,655	3,938	7.0	9,597	17.1	42,436	75.8
(旧北見市)	—	—	48,358	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(旧端野町)	—	—	1,833	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(旧留辺蘂町)	—	—	3,365	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(旧常呂町)	—	—	1,779	—	—	—	—	—	—	—	—	—
網走市	18,035	18,112	17,982	△ 77	△ 0.4	18,142	2,235	12.4	2,870	16.0	12,850	71.6
紋別市	11,127	11,390	11,670	△ 263	△ 2.3	11,801	1,042	9.2	2,852	25.3	7,376	65.4
美幌町	8,626	8,725	8,883	△ 99	△ 1.1	9,504	1,530	15.4	1,918	19.3	6,494	65.3
津別町	2,231	2,358	2,500	△ 127	△ 5.4	2,310	596	25.6	525	22.6	1,204	51.8
斜里町	5,547	5,759	5,703	△ 212	△ 3.7	5,619	1,467	22.3	1,234	18.8	3,878	58.9
清里町	1,671	1,784	1,869	△ 113	△ 6.3	1,759	745	35.3	310	14.7	1,057	50.0
小清水町	2,033	2,069	2,140	△ 36	△ 1.7	2,089	1,123	41.2	303	11.1	1,298	47.7
訓子府町	1,910	1,956	2,039	△ 46	△ 2.4	2,097	1,052	39.2	363	13.5	1,266	47.2
置戸町	1,304	1,367	1,455	△ 63	△ 4.6	1,424	481	32.3	132	8.9	874	58.8
佐呂間町	2,311	2,415	2,564	△ 104	△ 4.3	2,499	836	30.2	649	23.5	1,282	46.3
遠軽町	9,278	9,617	9,866	△ 339	△ 3.5	10,225	794	8.2	1,804	18.6	7,078	73.2
(旧生田原町)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(旧遠軽町)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(旧丸瀬布町)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(旧白滝村)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
湧別町	3,861	4,010	4,125	△ 149	△ 3.7	4,135	1,605	33.6	988	20.7	2,182	45.7
(旧上湧別町)	—	—	2,335	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(旧湧別町)	—	—	1,790	—	—	—	—	—	—	—	—	—
滝上町	1,295	1,376	1,478	△ 81	△ 5.9	1,402	274	21.5	202	15.9	797	62.6
興部町	1,757	1,877	1,929	△ 120	△ 6.4	1,796	568	27.2	519	24.9	1,001	47.9
西興部村	501	516	531	△ 15	△ 2.9	660	110	20.0	99	18.0	342	62.1
雄武町	2,062	2,228	2,354	△ 166	△ 7.5	2,241	656	26.0	782	31.0	1,086	43.0
大空町	2,874	2,967	3,014	△ 93	△ 3.1	3,056	1,525	39.9	426	11.1	1,873	49.0
(旧東藻琴村)	—	—	962	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(旧女満別町)	—	—	2,052	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	132,625	134,538	135,437	△1,913	△ 1.4	142,414	18,972	14.0	24,585	18.1	92,192	67.9



5 市町村の概要

きたみし

北見市



- [所在地] 〒090-8501
北見市大通西3丁目1番地1
- [電話番号] 0157-23-7111
- [FAX番号] 0157-61-7400
- [ホームページ] <http://www.city.kitami.lg.jp/>
- [市町村コード] 012084
- [開基年月日] 旧北見市 明治30年6月10日
旧端野町 明治30年6月7日
旧留辺蘂町 明治25年10月1日
旧常呂町 明治16年4月1日
- [市町村名の由来]
旧北見国（現宗谷・オホーツク・根室支庁管内）の中心に位置し、初の市制施行地となったことから。

- [市町村章の由来]
はかりの重り「分銅」と「北」の文字を一体図案化したもの。常に公正であり、将来の理想と豊かさを表している。

[歴史]

明治16年、常呂郡に常呂外六箇村戸長役場が開設されたのが、当市行政の起源である。明治28年、常呂村に高知県土佐団体が入地したのを草分けに、明治30年には内陸部の野付牛村に北光社、屯田兵が入地した。同年7月、前記役場から野付牛外一箇村戸長役場が分離、設置され、薄荷景気を背景に同42年二級町村制を施行して野付牛村となり、鉄道開通により当地域の中心地となった。大正4年、一級町村制を施行、置戸・武華村を分村し、翌5年、野付牛町となり、同10年更に相内・端野を分村し、昭和31年再び相内村を編入した。その間、昭和17年に市制を施行、北見市となる。常呂村は大正4年、四か村を統合して誕生し、昭和25年に町制を施行した。武華村は大正10年に町制を施行、留辺蘂町となった。端野村は昭和36年に町となった。平成18年3月5日、北見市・端野町・常呂町・留辺蘂町が合併し、新「北見市」となり、平成28年に合併10周年を迎えた。

[産業]

《 農業 》 北見市の農業は、大雪山の石北峠からオホーツク海沿岸までの東西約110kmと広範囲にわたる中で、約21,500haに及ぶ耕地面積を有し、稲作や麦類、馬鈴しょ、てん菜、豆類などの畑作と、玉ねぎを中心とした野菜などの土地利用型農業に加え、酪農、肉用牛・養豚などの畜産を含め多様な経営が行われている。

生産される農産物は、化学肥料や化学合成農薬の使用を必要最小限にするなど、環境との調和に配慮したクリーン農業にも取り組み、安全・安心で品質の高い農畜産物を消費者に届けている。

《 水産業 》 オホーツク海とサロマ湖における「つくり育てる漁業」と「資源管理型漁業」の推進により、ホタテ、サケ・マスなどを中心に生産性の高い魚業が展開されており、サロマ湖の漁業環境保全対策に取り組むなど安全で安心な水産物の供給や環境と調和した水産業の振興を図っている。

《 林業 》 市の行政区域面積の66%が森林で、林業は農業、水産業と並んで基幹産業のひとつとして位置づけている。約94,450haの森林面積の63%が国有林で、37%が民有林となっており、北海道有林を除く民有林のうち、人工林がトドマツやカラマツを主体に52%を占めている。これら人工林に対しては、森林の多面的機能の発揮に向け、造林や除間伐等保育施策を推進している。木材産業では、各種製材や木製品での地域材利用や技術開発、需要拡大に向けた取り組みのほか、木製品遊具等に触れる機会を通じて森や木を活用した生活・文化の創造を推進する木育活動を「オホーツク木のプラザ」などの拠点施設で行っている。

《 商 業 》 当市では、卸売機能、物流機能の集積が進み、オホーツク圏の物流拠点の役割を果たしている。卸売業、小売業を合わせた年間販売額は約3,531億円となっている。オホーツク総合振興局管内における小売業の販売額シェアは、42.4%、卸売業においても60.5%を超えるなど、拠点として確固たる地位を築いている。

《 工 業 》 オホーツク圏の豊富で良質な農林水産資源を背景とした食料品、木材・木製品製造業が盛んである。また、情報通信機械器具、電子部品・周辺機器製造業が従業員数、製品出荷額において大きな割合を占めており、地元の雇用拡大と地域経済活性化を支えている。

[文化・観光]

大雪山国立公園石北峠からオホーツク海までの東西110kmにわたる地域に4つのエリアがあり、自然、文化、温泉、味覚など、幅広い体験が可能。都市施設が整備された北見エリアには、かつて世界市場の7割を占めたハッカの歴史を伝える「北見ハッカ記念館」があり、隣接の「薄荷蒸溜館」では、ハッカの蒸留体験を行っている。令和2年10月に整備された「アルゴグラフィックス北見カーリングホール」では、「アドヴィックス常呂カーリングホール」に続く北見市で2箇所目の通年型のカーリングホールとして、カーリング体験を通年で楽しめる。田園風景の広がる端野エリアには、ホテルを備えた複合型リゾート施設「ノーザンアークリゾート」があり、夏場はゴルフ、冬はスキーが楽しめる。オホーツク海に接する常呂エリアには、北海道遺産となっている「ワッカ原生花園」があり、300種類以上の海浜植物の群落を見ることができる。林業と温泉の留辺蘂エリアには、開湯120年を超える温泉郷「おんねゆ温泉」を有し、世界最大級のからくりハト時計塔「果夢林」や、世界初の凍る水槽がある「山の水族館」などの観光施設も充実している。

その他文化施設としては、平成27年度に移転新築された中央図書館は管内最大規模の蔵書数を擁するものである。また、科学館・博物館・美術館の複合施設である北網圏北見文化センターは管内唯一のプラネタリウムが設置されている他、大小の各種美術展の会場としても活用されている。

広大な市域には歴史遺産や自然遺産などの文化財も数多く存在する。代表的なものとして、道指定天然記念物の「温根湯エゾムラサキツツジ群落」は自然繁殖で最大規模のものとして知られているものである。また、国指定史跡「常呂遺跡」は数千年間にわたり残された堅穴住居跡が地表のくぼみとなって約2700基分布しており、この種の遺跡としては国内有数の規模を誇るものである。

[イベント]

NHK杯カーリング 選手権大会 (11月上旬)

第1回大会から常呂町で開催されるこの大会は、道内外から約40のチームが参加し、熱戦がくり広げられる国内のビッグイベント。国内にカーリングが普及する先駆的な大会で選手登録が無くても参加できるオープン大会。

北見厳寒の 焼き肉まつり

(2月上旬)

焼き肉が盛んなまち・北見市では、真冬の寒さの中でも焼き肉を楽しむイベントを開催している。氷点下、タレやビールが凍るなか、約2,100人が700台の七輪を囲み、和気あいあいの雰囲気の中で焼き肉を楽しんでいる。

今では全国に知られるまつりとなり、多くのファンが訪れる。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため中止した。

おんねゆ温泉 つつじ祭り

(5月上旬)

7万株28万本もの天然の「エゾムラサキツツジ群落」（道指定天然記念物）を望む「つつじ公園特設会場」で開催される、おんねゆ温泉の春祭り。数多くのアトラクションやバーベキューで、満開のツツジとオホーツクの春を楽しめる。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため中止した。

北見ぼんちまつり

(7月中旬)

中心街を浴衣姿の市民が練り歩く「舞踊パレード」や、200mの綱を下帯姿の若者が引き合う「屯田大綱引き」が行われる夏祭り。まつりの最終日には常呂川河川敷において「花火大会」が行われる。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため中止した。

おんねゆ温泉まつり

(8月第1土・日曜日)

開湯120年を超えるおんねゆ温泉郷を代表する夏まつり。前夜祭の「夏激祭」をはじめ、各種出店やYOSAKOIソーラン、和太鼓などアトラクションが盛りだくさん。まつりのメインとなる「神輿川渡御」では100人余りの若者が神輿を担ぎながら川の中を練り歩く。同時に打ちあがる花火も担ぎ手たちに彩りを添え、毎年多くの観光客が訪れる人気イベントとなっている。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため中止した。

たんのカレーライス スマラソン

(9月中旬)

1チーム4人で、それぞれがカレーライス材料を取りに走るという、端野エリアならではのユニークなマラソン。順位やタイムにこだわることなく、ゴールした後は、各自が集めた材料で作ったカレーライスに舌鼓を打つ。もちろん、材料は新鮮な地場産の野菜を使用。仮装コンテストやカレー大喰いコンテストも開催される。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため中止した。

きたみ菊まつり

(10月中旬～下旬)

北海道最大級の菊まつり。会場では豪華絢爛な菊人形を配置した「菊人形展」や、約15,000鉢の菊を配置する「菊花展」、高い栽培技術を競う「菊花コンクール展」が開催される。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため中止した。また、年度当初から栽培されていた菊については、有効利用を図るために5日間屋外展示を行った。

～まちの施策・計画等～

第2期北見市総合計画に掲げる「ひと・まち・自然きらめく オホーツク中核都市-未来を拓く活力創造都市 北見-」を将来像とし、豊かな自然に恵まれた大地を大切に育て、人と人が支えあう、活力あるオホーツクの中核都市を目指し、市民と協働で創るまちづくりを進めています。

～主な事業・取り組み等～

【高齢者等のごみ出し支援事業】

ごみを自らゴミステーション等へ排出できない世帯を対象に排出支援及び希望者への安否確認を令和3年度から実施し、利用者の安心で健康的な生活環境の維持とごみに関するトラブルの防止を図ります。

【北見市基幹相談支援センター運営事業】

定住自立圏地域（北見市・美幌町・津別町・訓子府町・置戸町）の支援体制を充実（相談支援体制の整備や社会資源の開発）させるため、総合相談窓口の第1多機能拠点を北見市に、第2多機能拠点を美幌町に設置し、これらの運営を複数の民間法人に委託することで、それぞれの強みを活かした有機的な地域の支援体制の構築を図ります。

【カーリング振興事業】

市内小中学校において、地域資源であるカーリングを活用した体育授業の拡充を進めています。市内の子どもたちがカーリングに接する機会をつくり、競技人口を増やし、ジュニアカーリング競技の振興を図ることで、技術力を高め、次代の選手育成を進めています。令和2年度に整備された通年型カーリングホール（アルゴグラフィックス北見カーリングホール）を活用し、さらなる競技振興を図ります。

【ICT産業創出事業】

IT関連企業の集積を目的として取り組んできた、ふるさとテレワーク推進事業によって市内へ進出した企業と北見工業大学による共同研究や、地元企業とのビジネスマッチングにより、IoTやAIなど先端技術を活かした付加価値の高い独自製品の開発促進など、新たなICT産業創出を目指し、地域の「繋ぐ力」の向上を図っています。

あばしりし
網 走 市



- [所在地] 〒 093-8555
網走市南6条東4丁目1番地
- [電話番号] 0152-44-6111
- [F A X 番号] 0152-43-5404
- [ホームページ] <http://www.city.abashiri.hokkaido.jp>
- [市町村コード] 012114
- [開基年月日] 明治5年3月
- [市町村名の由来]
古語「アパ・シリ」（「入口の地」の意）より転訛した
もの。
- [市町村章の由来]
「ア」・「走」の文字を共通に図案化し、全体を錨の形
にして海港網走を表示したもの。

[歴史]

明治5年3月北見国網走郡の呼称が定まり、網走村の名が与えられたのが開基である。
その後、明治23年に釧路道路、同24年に中央道路が相次いで開通し、さらに大正元年鉄道網走本
線が開通したことにより移住者が急増し、大正4年には1級町村制を施行。その後も大正8年には築
港工事が開始されることとなり、これら交通機関の発達により農業、水産業が大きく進展した。ま
た、これに伴い各官公庁や事務所が集中するようになり、昭和22年2月11日市制を施行し現在に至
る。
昭和47年には開基100年・市制施行25年の記念式典を、平成9年は市制施行50年の記念式典を挙
行した。

[産業]

- 《 農業 》 北海道内でも有数の畑作地帯であり、営農集団組織による畑作3品（麦類・ばれ
いしょ・てんさい）を中心とする大規模農業が展開されているほか、玉ねぎ、なが
いも、だいこん等の野菜類や、生乳・畜産物の生産が行われている。
- 《 水産業 》 オホーツク海に面し、網走湖、能取湖などの湖のある網走では、サケ、マス、ホ
タテ、スケトウダラをはじめ、カニ、キンキ、シジミ、ワカサギ、シラウオなど多
種多様な魚介類を水揚げしている。また、高度な衛生管理体制を構築し、EUやアメ
リカ向けにサケやホタテ製品の加工を行う先進的な事業場があるなど、豊かな水揚
げを基盤とした水産加工業も盛んである。
- 《 商工業 》 当地域産業構造の中で、生産・販売の中心となっている一次産品の高付加価値化
への取り組みを進めていくとともに、新しい産業活動の創出をめざし、産学官金労
言の連携を図りながら、新製品開発及び起業化等に対する支援を進めている。

[文化・観光]

名勝・天都山、能取岬、網走湖、能取湖、ラムサール条約登録湿地の濤沸湖等の景勝地に恵ま
れ、さらに「天都山展望台・オホーツク流氷館」、「博物館網走監獄」、「北方民族博物館」等の
観光施設も充実し、網走国定公園の中心地として多くの観光客が訪れている。また、オホーツク海
に流氷が訪れる冬季には、「あばしりオホーツク流氷まつり」が開催されるほか、1月上旬から4
月初旬まで運航される流氷観光砕氷船「おーろら」は、国内外から人気を集めている。

[イベント]

あばしりオホーツク 流氷まつり

(2月中旬)

市民手づくりの氷雪像を中心に網走商港で開催される人気のイベント。迫力満点の大雪像や氷彫刻が並ぶ。まつり期間中は、幻想的な「氷雪像のライトアップ」や「流氷みこし」、「歌謡ショー」、「地元伝統芸能披露」などのステージイベントが行われる。また、オホーツクの魚介類を味わえるコーナーも設置され、「見る、遊ぶ、食べる」を思い切り楽しむことができる。

あばしりオホーツク 夏まつり

(7月下旬)

1,000人の市民参加を得て行われる「流氷おどり」やオホーツク海をバックに市街地の間近で行う「花火大会」など短いオホーツクの夏を満喫することができる各種イベントを実施。

オホーツク網走 マラソン

(9月下旬)

網走刑務所正門前がスタート会場という網走ならではのマラソン大会。フルマラソンは絶景の能取岬を經由し、約260万本のヒマワリが咲き乱れる大曲湖畔園地にフィニッシュする。その他にも、5km、3kmのコースを設定。フルマラソン制限時間は6時間30分で、初心者でも参加しやすい大会となっている。完走者には、裏面に「網走刑務所」の焼印が入った網走刑務所特製の木製メダルを贈呈。

～まちの施策・計画等～

総合計画で掲げる将来像「豊かな自然にひと・もの・まちが輝く健康都市 網走」の実現を目指し、市民、団体、企業、行政などがさまざまな形で連携を深め、まちが持つポテンシャルを最大限に活かしながら、誰もが健康で安心して暮らすことのできるまちづくりを進めています。

～主な事業・取り組み等～

【市民とともに取り組むまちづくり】

市民一人ひとりが住み慣れた地域で将来にわたって安心して暮らせるよう、検診体制の充実などによる健康寿命の延伸、地域医療・救急医療体制の維持、多様な主体の連携による地域福祉の充実などのほか、子育て世代包括支援センターによる妊娠から子育て期にわたる切れ目のない総合的な支援の提供に取り組んでいます。

また、災害に強いまちづくりに向けて、避難所の環境整備や災害用備蓄品の充実を進めているほか、防災訓練・研修を通じた防災意識の向上や、自主防災組織の活動促進による地域防災力の強化に取り組むなど、防災体制の確立に努めています。

【地域経済の活性化】

基幹産業である一次産業を中心に、東京農業大学や事業者と連携を図りながら、農水産物の高付加価値化やブランド化、地場産品の国内外への販路拡大、新製品の開発のほか、地域特性を活かした新産業の創出に取り組んでいます。

公共交通においては、持続可能な公共交通ネットワークの構築に向けて、オンデマンドバス「どこバス」の実証実験に取り組んでいます。

観光分野では、観光地域づくりの中心となる地域DMOへの支援やアドベンチャーツーリズムをはじめとする自然、食、景観などの地域特性を活かした魅力の創出や強化に取り組むとともに、インバウンドの誘客に向け、多様な関係者と連携しながら効果的な情報発信とプロモーションを展開しています。

また、令和2年5月には、人口減少・少子高齢化に伴い多様化する地域課題を戦略的に解決するための組織「地域課題戦略推進協議会（未来を考える戦略センター）」を設立、産学官金のさらなる連携体制を整えました。

～地域の話題、PR等～

【オホーツク網走マラソンon the web】

令和2年9月に開催予定であったオホーツク網走マラソン2020は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、やむなく中止を余儀なくされましたが、国内でも先駆けてスマートフォン用ランニングアプリを活用したWEBマラソン「オホーツク網走マラソンon the web」として開催し、大変好評をいただきました。

コロナ禍によって国内外で人の交流ができない状況下において、少しでもランナーの皆さまに楽しんでいただけたことは、当市にとっても大きな喜びです。

来年度は、これらの経験を生かし、より魅力的な大会を目指して、市民の皆様とともに取り組んでまいります。

もんべつし
紋別市



- [所在地] 〒094-8707
紋別市幸町2丁目1番18号
- [電話番号] 0158-24-2111
- [FAX番号] 0158-24-6925
- [ホームページ] <http://mombetsu.jp/>
- [市町村コード] 012190
- [開基年月日] 明治13年7月15日
- [市町村名の由来]
アイヌ語「モウペット」（静かな川の意）から転訛した
もの。
- [市町村章の由来]
「紋」の文字を図案化したもので、中央に配された帆型
（漁船）は糸偏の上部と「文」を併せ、外郭は下部の文字
で囲み海（オホーツク海）に面した都市を表現している。

[歴史]

明治13年紋別他9村戸長役場を設置。同30年湧別村戸長役場を分離。同33年雄武ほか3村戸長役場を分離。同34年渚滑村戸長役場を分離。

同42年4月紋別ほか1村の区域をもって二級町村制施行、村名を紋別村として同時に沙留ほか1村を分離。大正8年4月町村制施行。

同10年4月一級町村制施行。昭和29年7月紋別町、渚滑村、上渚滑村を合併して新たに紋別市を設

[産業]

《農業》 冷涼な気候条件のもと、恵まれた土地資源を生かした酪農業が中心で、乳牛飼養頭数約12,000頭、年間生乳生産量約58,000 t、肉用牛飼養頭数約11,000頭となっている。農地の利用状況は、牧草やデントコーンなどの飼料作物が主体で、畑作では、てん菜、かぼちゃ、馬鈴しょなども栽培している。

《水産業》 市の基幹産業であり、さけ・ます、ほたての増養殖を中心とした沿岸漁業とスケウウほかの加工向け多獲魚を水揚げする沖合漁業がある。また、水産加工業においては、漁業との連携により加工製品の開発及び消費拡大に努めている。

《林業》 豊富な森林資源を背景に、地域一丸となり、早くから緑の循環森林認証制度（SGEC）に取り組み、現在、森林面積の約89%が認証林となっているほか、本市を中心とする網走西部流域は、全国の認証林の約16%を占める日本最大の認証林エリアを形成している。この認証制度の推進により、持続可能な森林の活用と環境保全を両立させ、環境と経済の両面から地域林業・林産業の活性化に努めている。

《商業》 商業構成は、小売業が80%を占めており、多様化する消費者ニーズを踏まえながら企業の経営安定と活性化を図り、魅力あふれる商店街の形成などを通して、オホーツクの中核都市にふさわしい商業振興を目指している。

《工業》 豊かな資源を基に営まれている漁業、農業、林業と結びついた加工業、製造業が中心。地場製品の活用を基本としながら、さらに付加価値を高める技術開発・新製品の開発などを重視し、産業構造の高度化・複合化に努めている。

[文化・観光]

紋別市は国内で唯一流氷が来る海として知られているオホーツク海（オホーツクライン）のほぼ中央に位置しており、このオホーツク海が秘めている様々な可能性を追求するため遊びながら学べる「流氷科学センター」、氷海展望塔「オホーツクタワー」、流氷砕氷船「ガリンコ号ⅢIMERU」など一年を通じ流氷を体験できる施設整備とオホーツク海の新鮮な味覚を味わえる「流氷とグルメの街」となっている。この他、もんべつ観光港まつり、もんべつ流氷まつりなどの各種イベントの充実を図っている。

また、オホーツク紋別音楽セミナーの開催など、グレードの高いイベントの導入により、市の文化のさらなる発展と文化活動の活性化を図っている。

[イベント]

もんべつ流氷まつり

(2月中旬)

会場には巨大なメイン像が建ち、その周りに滑り台や大小様々な氷像が取囲み、夜間には七色のライトアップでファンタジックな世界が作りだされる。「流氷曳き人間ばん馬大会」や「オホーツクホワイトステージ」などの催し物のほか、特産品の販売などが行われる。

流氷あいすらんど共和国

(2月上旬～下旬)

あいすらんど名物、極寒の屋外でバーベキューを楽しむ「まるかじりパーティー」の他、「巨大迷路」を使った宝探しなど、冬の寒さを楽しむイベントとなっている。

もんべつ観光港まつり

(7月下旬)

地元小中高生による「音楽大行進」や各種ステージショーなど様々なイベントが行われ、夜は港から打ち上げられる花火大会は市外からも多くの人が来場し、港まつりを更に盛り上げるものとなっている。

もんべつグルメまつり

(10月上旬)

カニ、ホタテ、ホッケなどのオホーツクの特産品を格安で提供し、購入した海の幸をすぐに炭火焼きで食べられる焼物コーナーをはじめ、紋別近隣の街から出店された、農畜産物なども味わうことが出来る。

～主な事業・取り組み等～

「流氷と大地の恵みを活かし、人が輝き躍動するまち もんべつ」を都市像に掲げ、オホーツクの豊かな自然を活かし、潤いと安らぎに満ちた健やかな生活を目指して市民協働によるまちづくりに取り組む。

【確かな産業を育てるまちづくり】

水産業及び港湾施設について、昨年10月に第2船溜西物揚場の屋根付き岸壁が一部供用開始となり、引き続き、地域経済を力強く牽引する水産業の競争力確保と船舶の安全操業、漁獲物の衛生管理体制の強化に向けて、国と一体となり、早期完成を目指す。

ニューシティ開発公社のまちづくり組織としての体制の充実や機能の強化を図るとともに、意欲のある事業者や団体等による空き地・空き店舗を利用した新たな取り組みを促進するなど、まちなかの再整備と賑わい創出に向けて、積極的に取り組む。

【安心して健やかに暮らせるまちづくり】

子育て世代包括支援センターを新たに開設し、保健師との連携を図りながら、妊娠期から子育て期に至るまでの妊産婦・乳幼児の相談支援体制の充実・強化に取り組む。

地域包括ケアシステムの推進について、高齢者が安心して在宅生活を送ることができるよう、医療・保険・介護の関係機関が相互連携を強めながら、在宅医療と介護サービスの一体的な提供に向けた体制構築を加速させる。

【いきいきと学び続けるまちづくり】

子どもたちが、良質な環境のもとで、個性と能力を伸ばし、逞しく成長していくことができるよう、全小中学校に設置するコミュニティスクールを通じて、家庭・地域・学校からの声に十分に耳を傾け、幅広い視点と多様な手法を用いながら、全国平均を上回る学力・体力を身に付けることができる教育環境の整備を目指す。

「紋別市教育課程編成の手引き」を踏まえながら、総合教育会議を活用し、市と学校間の連携強化や情報共有の促進を図るとともに、教員の指導力向上に向けた研修体制の充実などに努める。

【オホーツクの個性を活かした交流のまちづくり】

外国人との共生社会の確立に向けて、国際交流サロンを拠点に、外国人技能実習生に対する日本語教室、文化体験、社会見学、市民交流、バス運賃助成、実習修了者への感謝状贈呈などの取組を実施している。引き続き、国際交流サロンの組織体制や機能を強化し、生活面における支援の充実に取り組むなど、外国人が安心して楽しく暮らしていくことができるまちづくりを推進し、外国人との共生社会を目指す。

令和3年1月から就航を開始する新ガリンコ号の発着場である海洋交流館の待合スペースをはじめ、飲食や物販機能の充実を図るなど、地域の活性化に貢献する魅力ある施設整備を推進する。

びほろちょう
美幌町



- [所在地] 〒092-8650
網走郡美幌町字東2条北2丁目25番地
- [電話番号] 0152-73-1111
- [FAX番号] 0152-72-4869
- [ホームページ] <http://www.town.bihoro.hokkaido.jp/>
- [市町村コード] 015431
- [開基年月日] 明治20年10月12日
- [市町村名の由来]
アイヌ語の「ピポロ」（水多く大いなるところ）より
転訛したもの
- [市町村章の由来]
片仮名の「ビホロ」を図案化したもの

[歴史]

明治20年10月、美幌外五ヶ村戸長役場が美幌村に開庁された。大正元年には鉄道が開通し、各地から移住者が増え、同4年2級村制施行により美幌村となり、同8年に津別村を分村、同12年町制施行により美幌町となり現在に至る。戸長役場が開庁されてから平成29年で130年を迎え、記念式典や美幌町史の発刊など、様々な記念事業が行なわれた。

[産業]

- 《 農業 》 積雪寒冷という自然条件の制約を受けながらも、平坦で肥沃な約10,700haの耕地を活かし、てん菜、小麦、馬鈴薯の畑作3品を中心とした土地利用型農業と、玉葱、人参などの野菜を作付けしており、近年はグリーンアスパラガスなどの収益性の高い野菜の作付を推進している。
また、畜産では乳用牛・肉用牛の飼養規模拡大と耕畜連携を図り、公共牧場の利活用と飼育技術・飼料自給率の向上及び、環境と調和した畜産経営を目指している。
- 《 林業 》 町の面積の約62%を占める森林と肥沃な大地を活かし、その中でもカラマツを主体とした人工林の造成、育成を進め、現在は網走管内有数のカラマツ生産地となっている。平成17年10月には「FSC森林認証」を取得し、環境に配慮した適切で持続可能な森林管理を推進するとともに、林産業や林家の経営安定を図るため、森林認証木材の有効利用の促進及び付加価値向上に努めている。
- 《 商業 》 交通の利便性の良さから近隣市町の商業圏として発展してきた。平成16年に中心市街地活性化基本計画を策定し、これまで中心市街地活性化対策に取り組んでいる。多くの事業者が加盟しているプリペイドカードの利用促進を図り、町内における消費の拡大を促進するとともに、各事業者が行う経営基盤の強化やサービス向上への取り組みを行うことにより、町内経済の更なる発展を図っている。
- 《 工業 》 稲美工業用地等への企業誘致活動を進めた結果、基幹産業である農業に関連した食品加工業をはじめ、鉄筋・鉄骨やコンクリートなどの建設資材工場、自動車・農機具整備工場などが立地し、地域の経済活性化や雇用の創出に繋がっている。

[文化・観光]

美幌町民会館「びほーる」において、町民の方々に組織する実行委員会などによる舞台公演をはじめ、各世代を対象とした芸術文化事業が積極的に展開されている。また、各種文化団体・サークルの日常活動や発表会も活発で、毎年秋には盛大に文化祭が開催されるなど、舞台稼働率は年間80%を超えている。

阿寒摩周国立公園の玄関口である美幌峠からは、日本最大のカルデラ湖「屈斜路湖」や知床連峰、大雪の峰々などの壮麗なパノラマが広がり、最近では早朝に見られる雲海や星空も注目され、多くの人を魅了している。また、オホーツクの自然や歴史などユニークな展示を通して学習できる「美幌博物館」、キャンプ場・宿泊施設を備えた「美幌みどりの村」など自然と親しみながら過ごせる施設も多い。ほかにも定番施設として、道の駅「ぐるっとパノラマ美幌峠」、温泉「峠の湯びほろ」などがある。

[イベント]

びほろ冬まつり (1月下旬)

子どもたちに人気のジャンボ滑り台を中心に、毎年恒例の千人鍋や大盛況のびほろスノーバスケット世界大会など、冬を楽しむイベントが行われている。

美幌観光和牛まつり (7月第3日曜日)

網走川河畔公園を会場として、美幌産和牛の焼肉パーティー、趣向を凝らしたステージイベント、公園内の多彩なアトラクション、子ども広場、模擬店などで河畔を埋め尽くす。

びほろ夏まつり (8月上旬)

花火大会のほか、盆踊りや美(B)級グルメ屋台村など、イベントが盛りだくさん。

デュアスロン大会 (8月中旬)

陸上競技場をスタートとし、ゴールまでの100kmをランニングと自転車により自己の体力の限界に挑戦し、たくましい精神力を養うとともに参加者同士の友好を深める。

美幌ふるさと祭り (9月上旬)

町民手作りの出店が多数軒を連ね、御輿や各種ステージイベントなどで、毎年10万人以上が来場し、賑わいを見せる。

～まちの施策・計画等～

第6期美幌町総合計画による「ひとつつながる、みらいへつなげる ここにしかないまち びほろ」を将来像とし、先代から引き継いだ地域の資源や環境を大切に守りながら、地域の力としていくとともに、人の輪や交流を今まで以上に大切に、「人が育つ」「人が中心」のまちづくりを進めています。

<自治基本条例に基づくまちづくり>

「美幌町自治基本条例」を平成23年4月に施行し、①町民主体、②情報共有、③町民参加、④協働の4つの基本原則を柱に、町民主体の自治の実現に向けて取り組んでいる。

<地方版総合戦略の推進>

「美幌町まち・ひと・しごと創生総合戦略」に基づく「美幌町人口ビジョン」に向かって、平成27年度から10年にわたり施策の具体化を図っている。

<地域医療を担う町立病院の改革>

医師、看護師の確保を初めとする診療体制の充実を図り、町民に信頼される病院運営を行い、経営の健全化に努める。

～主な事業・取り組み等～

<子育て支援>

妊婦の出産の不安を少しでも解消するため、自宅の住所やかかりつけの病院、出産予定日などを事前登録することにより、緊急時には医師からの適切な指示を得ながら速やかに病院へ搬送できる制度「妊婦エントリーネット119」に取り組んでいる。

<木育、環境、林業との相互連携>

森林・林産業の持続的発展と地域経済の活性化、さらには、地球温暖化問題への取組として、美幌町で育った森林認証材を使用した住宅へ助成する「美幌町産材活用促進事業」、樹皮や端材、オガ粉などの未利用木材を円柱状に固めた木質ペレットを燃料とするストーブの購入費用の一部を助成する「木質ペレットストーブ購入補助事業」などに取り組んでいる。

また、環境省のモデル事業となる環境共生住宅「びほろエコハウス」において、環境研修や交流事業を進めるとともに、平成27年にリニューアルした美幌林業館「きてらす」を拠点に「木とふれあい、木に学び、木と生きる」取組である木育活動を進めている。

<持続的で競争力のある農業に向けた取組>

美幌みらい農業センターでは、地域農業のさらなる発展と新たな展開をめざし、独自性と高い収益性を期待できる新規作物の調査・研究に取り組んでいる。

これまでに地域に定着した成果として、「アスパラガス・ハウス立茎栽培」が道東最大の産地に成長したことと、てん菜などの育苗ハウスの遊休期間を有効利用して行う「イチゴ苗の増殖栽培」が極めて高い収益性を確保し、国内最大のイチゴ苗産地として成長したことがある。さらに「アスパラガス・伏せ込み栽培」に取り組む、国産品が品薄となり希少価値が高まる冬期間に出荷する冬アスパラガス「冬姫」を、国産品が皆無となる11月初旬に出荷することに初めて成功し、地域農業者への普及も進めている。

つべつちよう
津別町



[所在地] 〒092-0292
網走郡津別町字幸町41番地
[電話番号] 0152-76-2151
[FAX番号] 0152-76-2976
[ホームページ] <http://www.town.tsubetsu.hokkaido.jp/>
[市町村コード] 015440
[開基年月日] 明治16年4月1日
[市町村名の由来]
アイヌ語の「ツベツ」（山の出ばなを通っている川）より転訛したもの。

[市町村章の由来]
ツ別の文字を図案化、中央のツは森林の町としての山を中央の白地は山麓に連なる沃野を、円形は円満と団結を表し、躍進津別を象徴している。

[歴史]

明治16年4月1日旧土人救済事務所の設置を開基としている。大正8年4月1日美幌村より分村し津別村となる。昭和18年4月1日町村制を施行。同21年9月10日町制を施行し津別町となる。昭和59年に開基100年を迎え、平成31年（令和元年）に開町100年を迎えた。

[産業]

《農業》 耕地面積5,700haに小麦、てん菜、馬鈴しょ、豆類等の土地利用型作物に加え、玉ねぎ等の野菜を取り入れた畑作と酪農・畜産経営が混在する地帯で、それぞれが特色ある農業を営んでいる。特に玉ねぎ等の野菜では減農薬・減化学肥料栽培による「特別栽培」に取り組み、酪農では日本初となる有機畜産物JAS規格認証を取得した「オーガニック牛乳」を生産するなど、消費者に安全・安心な農産物を提供し、消費者ニーズを積極的に捉えた農業を展開している。

また、環境との調和やコスト削減を目指し、堆肥センターを軸とした廃棄物系バイオマス（家畜糞尿・生ごみ・下水道汚泥・樹皮）の循環活用に取り組み、耕畜林連携による資源循環型の「環境に配慮した農業」の推進や、農業経営の効率化・安定化のため「農業生産法人による生産体制の整備」などに取り組んでいる。さらに平成27年度からは効率的な大規模機械化体系を築くために圃場の大区画化や暗渠排水等の整備を進め、農地の土地利用を計画的に再編し、担い手の経営規模の拡大と安定化、安全・安心な農産物の生産に向け、「国営農地再編整備事業」に着手している。

《林業》 昭和57年に全国で初めて「愛林のまち」を宣言し、森林の持つ公益的役割の保続による郷土の発展と社会貢献への誓いを表明した林業の町。森林面積の約90%がSGEC認証森林であり、認証材の利用促進のほか、木質バイオマスの利活用及びJ-クレジットにも取り組み、環境に配慮した持続可能な森林管理に努めている。

また町内では、一般製材はもとより、経木やシラカンバを使用したスティック、精密機械と高い技術力による加工で世界水準に及ぶ木製家具や木製部材、また全道一の生産規模を誇る合板などが生産され、特色ある林産業が町の発展に寄与している。

[文化・観光]

町内にある中央公民館や町民会館では、町や町民組織による様々な事業・教室が開催され、文化芸術、サークル活動等の場として活用されている。平成27年度に20回目を迎えた津別町民芸術劇場主催の「つべつ日本フィルセミナー」では、日本フィルハーモニー交響楽団の団員が、全国から参加したアマチュア演奏家や学校の吹奏楽部員を指導し、最終日に団員とセミナー受講者で編成されたオーケストラが成果を披露するコンサートを開催しており、町内外の児童から大人まで幅広い層に楽しまれている。

また、弟子屈町との町界にある津別峠は、阿寒摩周国立公園を眺望できるビューポイント。早朝には展望台から雲海を見ることができ、雲海が消えれば、眼下には屈斜路湖、その彼方には知床連山やオホーツク海、反対側には雄阿寒岳、雌阿寒岳、また晴れた日には大雪山連峰を望むことができる。さらに阿寒摩周国立公園の北側に位置するチミケツ湖は、森林浴・キャンプ・カヌー・バードウォッチング等のアウトドアを満喫できる天然林が広がり、訪れる多くの観光客を魅了している。

[イベント]

クリンソウまつり (九輪草)

(6月中旬～下旬)

会場のノンノの森は、約30万株のクリンソウが咲く大群生地。森林セラピーや森の音楽会等が行われ、会場に隣接する「ランプの宿 森つべつ」ではランチや温泉も楽しめる。

つべつ夏まつり

(7月第1土・日曜日)

津別最大のイベント。津別河岸公園を会場に、前夜祭は千人踊りで幕を開け、花火大会で最高潮に達する。本祭りは、公園内を流れる川やステージ会場内で多彩なイベントが開催され、バーベキューを囲む家族・グループで賑わう。

つべつふるさと まつり

(9月9日・10日)

津別神社の秋の大祭にあわせ町民手づくり企画による食べ物やゲームコーナーなどの露店が立ち並ぶ、アットホームなまつり。

つべつ紅葉マラソン

(10月第1日曜日)

鮮やかな紅葉に色づく町並みをバックに駆け抜けるマラソン。コースもハーフ、10km、5km、3kmのコースが設定され、子供から大人まで気軽に参加できる大会。

つべつ産業まつり

(10月第3日曜日)

畑から直送の農産物や農産加工品が安価で販売され、いもや玉ねぎの詰め放題や抽選会が行われる、実りの秋を感じられるまつり。

～まちの施策・計画等～

津別町では令和2年度から令和11年度までの10年間を計画期間とする第6次津別町総合計画を策定しています。総合計画の中では「暮らしたい、魅力あふれるエコタウン」という将来像を目指し、その実現のため6つの取組「住み続けられる安心快適な生活環境を形成する」「若者・子育て世代を惹きつける（住む場所・働く場所・教育・子育て）」「まちの未来づくりは人をつくる（教育と人材育成に力を入れる）」「地域デザイン、地域ブランディングで価値を高める（地域資源・産業・暮らし）」「つべつの強みを発信する力を高める（シティプロモーション）」「『2ndフロンティア・津別』で新しい移住者を呼び込む」を重視し、各領域での様々な事業や計画が進められています。

【津別町まち・ひと・しごと創生総合戦略】

津別町では人口減少と地域経済縮小の克服による地方創生に向けて、令和2年4月に「第2期津別町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、4つの基本目標「基本目標1：津別町にしごとをつくり安心して働けるようにする、これを支える人材を育て活かす」「基本目標2：津別町への新しいひとの流れをつくる」「基本目標3：若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる、誰もが活躍できる地域社会をつくる」「基本目標4：時代に合った地域をつくり、安心な暮らしを守るとともに、地域と地域を連携する」に基づき、現在様々な官民連携の取り組みが進められています。

～主な事業・取り組み等～

【友好都市交流】

津別町と台湾彰化県二水郷は平成24年10月8日友好都市提携を締結しました。中学生相互交流事業として、平成28年度と平成30年度には津別中学生が二水郷へ訪問し、平成29年度には二水郷の中学生が津別を訪れ、中学生同士の交流を深めました。さらに平成29年度には郷長をはじめ二水郷関係者が来町し友好都市提携5周年記念式典を開催しました。今後もさらに相互に理解と友好を深め、文化や青少年の交流など民間交流を推進していきます。

しやりちょう
斜 里 町



[所在地] 〒 099-4192
斜里郡斜里町本町12番地
[電話番号] 0152-23-3131
[F A X 番号] 0152-23-4150
[ホームページ] <http://www.town.shari.hokkaido.jp/>
[市町村コード] 015458
[開基年月日] 明治12年4月7日
[市町村名の由来]
アイヌ語の「サルイ」（葦の生えている所）より転訛したもの。

[市町村章の由来]
「シャリ」の文字を雄々しく羽ばたきする鳥形に表現し、町勢の飛躍と発展を意味しており、円は平和を表象している。

[歴史]

開基は、明治12年に斜里村外四村戸長役場が設置されたのが始まりである。大正4年2級町村制を施行し、5村を合併して斜里村となる。大正14年に釧網線、網走～斜里間が開通し、入植者も急増する。

昭和14年町制を施行。昭和18年上斜里村（現清里町）を分村した。

[産業]

《 農業 》 澱粉に加工される馬鈴薯、砂糖の原料となるてん菜、小麦の畑作3品が作付面積のおよそ7割を占め、このほかに人参や玉ねぎ豆類などが作付されている。人参の生産では、日本有数の高度な人参洗浄選果施設を整備するなど先進的な取り組みが行われており、その品質の高さが広く知られている。また、農業後継者の育成、ICT農業の普及、安全・安心な斜里産農産物の販路拡大に向けた取り組みが行われている。

《 水産業 》 定置網による鮭鱒漁が盛んで、秋の朝方には高鮮度な鮭鱒が盛んに水揚げ出荷される。鮭鱒が産卵する自然豊かな母川と、豊かな海に支えられて、水揚げされる鮭の漁獲量は市町村別で17年連続日本一を記録している。沿岸にウトロ、知布泊、斜里の3つの漁港があり、ウトロ漁港のウトロ鮭テラス2階からは、水揚げ選別作業を真上から自由に見学することができるようになった。

《 商工業 》 平成19年に開設された「道の駅しやり」を中核として、中心市街地活性化事業が進み、にぎわいを創出する取り組みが活発に行われているほか、行政ポイント発行によるポイントカード事業など地元消費の拡大や域内循環にも力を入れている。
また、世界自然遺産知床には年間を通じて多くの観光客が訪れ、観光と関連した商業活動や知床ブランディング活動も進展している。町の工業は農産物や魚類などの食料品関係の加工業が主である。

[文化・観光]

オホーツク海に面した海岸地帯から多数の埋蔵文化財が発掘され、町の貴重な文化遺産となっており、これらの資料を展示している知床博物館がある。原始的な自然を抱えた知床が世界自然遺産に登録され、年間約120万人の観光客が訪れている。海上からの断崖の遊覧、知床峠から望む北方領土、知床自然センターの映像展示など、四季を通じて知床の自然を満喫することができる。また、環境保全と観光利用を両立させるルールづくり、自然と共生する新たな観光のあり方の構築を目指す「知床型エコツーリズム」を提唱している。

[イベント]

羅臼岳山開き

(7月第1日曜日)

標高1,660mにおよぶ知床連山の最高峰羅臼岳を約6時間のルートにて登山する。羅臼岳山頂からは知床連山の縦走路も見渡せ、太平洋側には北方領土・国後島の最高峰・爺々岳も望むことが出来る。また、午前6時から岩尾別登山口で安全祈願祭がとりおこなわれる。

しれとこ夏まつり (しれとこ斜里ねぶた)

(7月第3金・土曜日)

斜里ねぶたは、北海道の三大あんどんまつりのひとつに数えられ、友好都市青森県弘前市との文化交流の中から始まった知床最大級の祭りである。大小15基余りの扇ねぶたが町内の目抜き通り約2.5kmを練り歩き、全国各地から多くの観光客が訪れる。日中も弘前市の物産展をはじめ、多数のイベントが開催される。

しれとこ産業まつり

(9月第4日曜日)

町内で生産された農水産物や、斜里町の友好都市である青森県弘前市のりんごなどの特産品即売会をはじめ、あきあじ鍋、チャンチャン焼き、でんぷんだんごなどの味覚を満喫できる。また、ステージイベントやつかみどりコーナーも開催されている。

知床流水フェス スタンプラリー

(1月30日～2月末日)

2017年から開催してきた知床流水フェスは例年までの集客型の野外イベントに代わり、2021年からは分散型イベントとして町内のアクティビティや宿、飲食店、土産物店等を繋ぐスタンプラリーを開催する。

～まちのPR～

平成17年に世界自然遺産に登録された知床を有する斜里町は「100平方メートル運動の森・トラスト」をはじめとする、自然環境を守り育てる活動を町民ぐるみで取り組んでいます。

基幹産業については馬鈴薯、てん菜、小麦を中心とする農業、市町村別鮭の漁獲量日本一を誇る漁業、地域の自然や文化との共生を目指す観光により主に構成されています。

斜里町の地場産品をブランド品として認証し、広く全国に発信することにより、地域産業の振興と地域の活性化を図ることを目的とした知床しゃりブランド認証制度を平成21年度に創設し、現在のところ25商品が知床しゃりブランド品として認証されています。

今後とも「みどりと人間の調和を求めて」を町政の基本理念とし、町民とともに考え、語り合い、行動する協働のまちづくりによりさらなる発展を目指します。

きよさとちょう
清里町



- [所在地] 〒099-4492
斜里郡清里町羽衣町13番地
- [電話番号] 0152-25-2131
- [FAX番号] 0152-25-3571
- [ホームページ] <http://www.town.kiyosato.hokkaido.jp/>
- [市町村コード] 015466
- [開基年月日] 明治30年4月1日
- [市町村名の由来]

清里町は清らかな里であるという意味と、小清水村と斜里町から分村したという歴史を将来に残す意味（「清」は小清水の清で「里」は斜里の里である）を兼ねて名付けた。

[市町村章の由来]

周囲の円は町の和を表明し、中央の三角は清里町の象徴秀峰斜里岳を図案化したもの。

[歴史]

開基は、明治30年4月1日野川駅通所の塚本伊勢太氏が退任して神威10線21号に定住し、開墾の鋤を打ち込んだ時とされている。大正年間に次々と移住者の入地が続き、昭和4年の鉄道開通（上札弦駅まで）とともに、さらに移住者が激増し、昭和18年4月1日斜里町と小清水村から分村し上斜里村となる。分村後積極的な村政により、昭和30年には1,808戸、10,551人と村勢が安定し、清里町と改称し現在に至る。平成9年には清里町100年記念を迎え、盛大な記念式典・記念事業が行われた。また、平成17年には町制施行50年、平成30年には120年・開町75周年を迎えた。

[産業]

- 《農業》 秀峰斜里岳の裾野に広がる清里平野に耕地約8,400haを有し、大型機械を導入した大規模な畑作農業が行われている。畑作は馬鈴しょ、てん菜、小麦の3作を中心にスケールメリットを生かした合理的、近代的な農業が展開されている。酪農・畜産は、酪農肉用牛生産近代化計画に基づき振興が図られている。
- 《林業》 町の森林は全面積の約70%を占め、国有林が約95%、民有林等が約5%である。森林資源は豊かであるが、人工林の大半がカラマツであり、今後需要の拡大、流通加工対策の促進、品質の改良など生産性の高い林業を展開促進させていく。
- 《商業》 過疎化による人口の流出、近隣市町への大型店の進出、日常生活圏の広域化により購買力が町外に流出する傾向が見られ、魅力ある商店街の形成、特徴ある店づくり等、住民から親しまれる商業環境づくりが必要となり、平成5年度に市街地近代化事業実施計画を策定し、平成6年度より事業に着手。平成10年商店街の拠点施設となるコミュニティーセンターが完成。
- 《工業》 町の工業は、木材資源を活用した木材・木製品製造業が主体であり、引き続き、地場産業の開発促進、地域の特性を生かした工業の振興を図る。

[文化・観光]

町では、教育文化活動の新しい拠点として公民館、ホール、図書館等の複合機能を有した清里町生涯学習総合センター（プラネット'97）が平成9年に完成し、プラネットステージ公演や町民文化祭等幅広い文化活動が行われている。また、郷土の開拓にたずさわった先人の労苦を偲び郷土芸能「竜神」が創作され、青年層を中心に伝承活動が行われている。

摩周湖の東側に位置する裏摩周展望台は夕日が美しく、違った角度の摩周湖を眺望することができる。また、日本百名山の一つで、多くのアルピニストが憧れる斜里岳は、頂上からはオホーツク海、知床連峰、国後島等が一望できる。水の水しさが認められ、平成29年8月に阿寒摩周国立公園に新たに加えられた神の子池は、青い水をたたえる池として知られ、多くの観光客が訪れている。その他特産品である「じゃがいも焼酎」を製造する焼酎醸造所、オートキャンプ場、きよさと情報交流施設きよ〜る・さくらの滝・清里温泉緑清荘・道の駅パパスランドさつつる・緑の湯などがあり、自然と親しみながら過ごすことができる。

[イベント]

斜里岳山開き

(6月最終日曜日予定)

登山ルートは清里町側からの「清岳荘(せいごくそう)」を通るルートが人気。山頂までの所要時間は、登りで約3時間、下りで約2時間半のコース。

山頂からは知床半島、摩周湖、オホーツク海と斜里町、清里町の広大な畑作地帯が眼下に広がる。

また、午前6時30分から山小屋「清岳荘」で安全祈願祭が行われる。

ふるさと産業 まつり

(9月第1日曜日予定)

前夜祭のじゃがいも踊りパレードで始まり、当日は旬の地場農産物やじゃがいも焼酎など清里のおいしい特産品を満喫できる。また、ステージではお笑いステージや歌謡ショーなどが行われ、毎年多くの人々が来場する。

斜里岳 ロードレース

(9月予定)

斜里岳の麓で自然豊かな田園風景を楽しみながら走るマラソン大会。コースはハーフ、5km、3km、2km、1km(親子)があり、幅広い年代の方が気軽に楽しめる大会となっている。

レース終了後は、清里の味覚を味わえるローカルフードフェスティバルや清里特産品が当たる抽選会を実施。また、参加者全員に町内温泉施設の無料入浴券を贈呈している。

～まちのPR～

清里町は自然豊かな町で、「整然とした防風林と大規模畑作」の農村景観は、「全国農村景観百選の特に優れた20選」にも選ばれるほど魅力があります。

また、町民と町とのパートナーシップによる「花と緑と交流のまちづくり事業」を展開しており、主要な道路や公園、公共施設などに花と緑の景観づくりを取り組み、地域の方々の一人ひとりが美しい景観を共有できるまちづくりに取り組んでいます。平成15年度には「全国花のまちづくりコンクール」で日本一に輝いています。

平成28年10月より、「日本で最も美しい村」連合へ加盟しており、連合の活動を通じ、清里町の魅力を全国に発信・PRしています。

特産品であるじゃがいも焼酎と、小麦をはじめとする農産物の加工による付加価値向上と新たな特産品開発の取り組みが展開されています。

～まちの施策・計画等～

「住民参加と協働・共生・共創」を基本に、平成27年10月に策定した「清里町まち・ひと・しごと創生総合戦略」における、「雇用の創出」、「新しい人の流れをつくる」、「若い世代の結婚・出産・子育てをかなえる」、「時代に合った地域をつくる」の4つの基本方針と、平成28年度にスタートした「第5次清里町総合計画」後期5カ年計画に基づき、健全財政の堅持、暮らしと生活を支える産業経済の振興や、快適な生活を営むことのできる社会基盤の整備をはじめ、特に未来を担う子どもたちの健全育成と子育て世代の負担軽減を図るため「子ども・子育て支援」と「教育支援」事業を重点的に取り組んでいます。

～主な事業・取り組み等～

【ケアハウスきよさとがオープン】

清里町保健福祉総合センターの北側に、軽費老人ホーム「ケアハウスきよさと」(定員50名)を建設整備し、平成30年10月に開所しました。入居者は、60歳以上で自宅での生活に不安があるものの、少しの見守りがあれば自立して生活できる方が対象です。ケアハウスは、食事やお風呂の提供、職員の見守りにより、入居者の方が安心して快適に生活できる「住まい」となっています。

こしみずちょう
小清水町



- [所在地] 〒099-3698
斜里郡小清水町元町2丁目1番1号
- [電話番号] 0152-62-2311
- [FAX番号] 0152-62-4198
- [ホームページ] <http://www.town.koshimizu.hokkaido.jp>
- [市町村コード] 015474
- [開基年月日] 明治12年7月
- [市町村名の由来]

明治23年駅通所が開設された折、道路沿いの湧水が清い飲み水として称美され駅通名「小清水」とした。

[市町村章の由来]

上の半円状の部分は「小」を表し、中心円内が「清」を表し、下の半円が「水」を表し、三文字合わせて「小清水」を意味する。

[歴史]

開拓前、止別原野はカシワやナラ、カヤやハギが密生するうっそうとした原生林で、止別河口、涛沸湖畔、涛釣沼及びニクル沼付近にアイヌ人たちがそれぞれ小さな集落をつくっていた。明治5年、北見国根室支庁斜里郡として戸長が置かれ、現小清水はこの郡にあったが、当時斜里郡は蒼瑠、止別、斜里、朱円、遠音別の5つの村から成っていた。

小清水町の歴史は明治11年7月「郡区町村編成法」が制定され、斜里郡斜里村外4ヶ村の行政区が確定したのが始まりである。その後、大正8年4月に旧斜里村より分村し小清水が誕生。昭和28年10月には町制施行、同43年には開町50周年を記念して町民憲章を制定した。昭和53年に開基100年、平成10年に開基120年・開町80年、平成15年に町制施行50年、平成30年には開町100年を迎え記念式典を行った。

[産業]

《農業》 農用地は約1万haを有し、1戸あたりの経営面積も30haと大規模な畑作地帯である。畑作は、馬鈴しょ、てん菜、小麦の畑作三品を中心に、多くの野菜が生産されている。また、酪農をはじめとする畜産もおこなわれている。

小清水町農業振興計画を基本に新たな収益性の高い作物の導入定着化と畜産の振興による寒冷地農業の確立をし、国際化に耐え自立できる農業の振興を図る。

《林業》 町の面積の約半分が森林で、その内訳は国有林が8割、民有林が2割となっている。林種別比率は人工林が5割を占め、今後計画的な造林、下刈、除間伐等を行い、森林の整備育成と森林のもつ公益的機能の強化を図る。

《商業》 近年の諸情勢から購買力が町外に流出しており、多様化する消費者ニーズに対応するため魅力ある商店街環境整備が必要となっている。

《工業》 町の1次産品を中心とした事業所があるが、良質な原材料の安定的な確保とあわせて、新製品や高次加工品の開発及び規格外品の有効利用に努め、付加価値の向上を推進する。

[文化・観光]

心の豊かさを求める文化活動は、地域に根ざしたものとして町民文化祭等を開催しているが、今後は地域性を活かした文化創造や芸術性の高い文化事業の招へいを定期的に行なうことなどが望まれている。

「網走国定公園小清水原生花園」と「阿寒摩周国立公園藻琴山」を拠点にもつ本町は、春から夏にかけて咲き乱れる「小清水原生花園」、野鳥の宝庫「涛沸湖」、野性動物と人間が共存できる森づくりをめざし、全国で2番目の自然環境保全法人に指定された「オホーツクの村」、四季の変化を見せる「藻琴山」、オホーツク海ならではの流氷など、本町はいつ訪れても北海道らしい自然を味わえる町である。

[イベント]

ふるさとまつり
じゃがいもフェス
ティバル
(7月下旬)

農産物の収穫に感謝し、本町特産のじゃがいもをメインテーマに町民が集いふれあう（交流）手づくりのまつりで、新じゃが直売、ステージショー、花火大会など多彩なイベントがくり広げられる。

～まちのPR～

小清水町は「未来につながるまちづくり」を基本的な理念として町政執行に努めます。

〈町政運営の基本的な考え方〉

- 「住んで良かったまち・住みたいまち」づくりを推進するため、移住・定住促進対策に取り組む
- 町民にまちづくりへ積極的に参加してもらい、誠実で公平・公正な町政を行う
- 住民福祉の向上を図るため、地域の医療確保、子育て・高齢者支援を重要施策として「福祉でまちづくり」を推進する
- 各種施策を実行するため、町財政の健全性を維持する

～主な施策～

- 農業担い手の育成・確保に力を入れ、農業・商工業・観光業の相互連携による地域経済の活性化を図る
- 地域医療の確保と充実や住民が互いに支え合う地域コミュニティの活性化を図る
- 安心して暮らすための社会資本基盤の質の向上のため、防災拠点を兼ね備えた「複合型コミュニティ施設」の早期建設をめざす

～地域の話題～

交流人口の増加や雇用の創出のため、地方創生拠点整備交付金を活用した「小清水ツーリストセンター」は、平成30年4月のオープン後、毎年18万人以上が訪れる施設となった。周辺地域にある道の駅や飲食店への波及効果もあり、民間企業との連携でさらなる町の魅力発信に取り組んでいく。

くねっぷちょう
訓子府町



[所在地] 〒099-1498
常呂郡訓子府町東町398番地
[電話番号] 0157-47-2112
[FAX番号] 0157-47-2600
[ホームページ] <http://town.kunneppu.hokkaido.jp/>
[市町村コード] 015491
[開基年月日] 明治30年5月8日
[市町村名の由来]
アイヌ語「黒いところ やち川にして水黒し」

[市町村章の由来]
外周の「北」は、北海道と北見地方を、中央の「訓」は、町名を表し、5個の円を組み合わせ、相互協力を表す。

[歴史]

明治30年高知県から北光社移民団13戸が入植し開基となる。同44年、網走本線が開通し、物流等に活況を見せ始めた。大正3年には訓子府尋常小学校が開校。大正4年には置戸村の一部として野付牛町（現北見市）から独立し、同9年には訓子府村として分村した。このころから造田が盛んになり酪農も定着し、主要産業の農業の基礎が固まっていた。戦後の混乱を脱した昭和26年に町制を施行し、昭和33年には町内会が市街地に改組され、農事実践会が農村部に組織されるなど、住民自治意識が高揚した。町制施行20周年の昭和45年に町民憲章を制定し、平成8年には開基100年、令和2年には開町100周年・町制施行70年を迎えた。

本町のまちづくりにおいても、基幹産業である農業土地基盤整備をはじめ生活環境整備、教育・文化施設整備、福祉施設整備などを行い、着実な発展を目指していく。

[産業]

《農業》 「エコ・アグリタウン」環境調和を目指し営まれているくねっぷ農業。農家戸数は271戸で微減傾向にある。耕地面積は1戸当たり21haで、全体面積は5,958ha。作付面積は水稲63ha、小麦897ha、玉ねぎ1,484ha、てん菜754ha、馬鈴しょ694ha、飼料作物1,555aなど。クリーン農業に早くから取り組み、玉ねぎや馬鈴しょの特別栽培が注目されている。畜産は酪農が中心で、乳牛6,131頭（45戸）、肉用牛525頭（9戸）が飼育されている。また、農業後継者の確保を目的に、新規就農者等支援条例に基づく支援を実施している。

《商業》 商店街活性化の促進として、商工団体の育成やその推進母体である商工会との連携を推進。現状の施策としては、住環境リフォーム促進事業をはじめ新規店舗出店や既存店舗の改修、空き店舗を活用して事業を行う事業者への支援、並びに就労助成として商工業者と就労者本人・後継者などへの助成事業を行っている。また、本町商工業の将来を見据えながら持続的発展が図られるよう、中小企業・小規模企業振興条例を制定した。

《鉱工業》 肥料・食品の製造業が中心。肥料製造は、町内に産出する石灰石を原料とした土壌中和剤や融雪肥料などを製造している。

[文化・観光]

町では伝統的に、教育・文化・スポーツの振興に力を入れており、これらを通して青少年・女性・高齢者の文化、スポーツ活動も活発に展開されている。図書館は、過去に貸出率日本一を7年連続通算8回達成したこともあり、豊富な蔵書に加え読みきかせ会など、住民活動とのリンクが図られている。平成12年度からは、インターネットの整備により蔵書の検索や貸出予約ができるなど、さらなる利用の拡大に努めている。観光資源には、パークゴルフ場やスポーツのほか、アートタウンプロジェクトによる彫刻の設置が進む憩いの空間であるレクリエーション公園、温泉保養センター及び遊び心と健康増進やリハビリ効果を加味した「温水プール」や平成31年にオープンのスポーツセンターは、町外の利用者にも好評である。

平成28年に開園した認定こども園「わくわく園」は、一貫した保育・教育を受けることができ、施設には町内及び姉妹町の木材を使用、また3歳児以上は保育料も無料である。

町の一地区に、地方独立行政法人北海道立総合研究機構北見農業試験場・ホクレン農業協同組合連合会訓子府実証農場等が集中しており、町外から施設を訪れる人も多く、農業技術の発信基地となっている。

[イベント]

さむさむまつり

(2月第1日曜日)

訓子府町産業観光振興協議会の主催で、訓子府町公民館駐車場(特設会場)にて開催。青年4団体及び小学生・こども園児が制作する雪像群に囲まれたおまつり会場では、大雪像や人気キャラクターショー、雪上コートで行われる綱引き大会に人気が集まるほか、女性・青年団体が温かい食べ物を提供する売店が軒を連ね、多彩な催しが繰り広げられる。例年約2,000人を超す賑わいで盛り上がりを見せる。

ふるさとまつり

(7月第2土・日曜日)

訓子府町産業観光振興協議会の主催で開催。土曜日の前夜祭では、趣向を凝らした約10基の活気ある手作り行灯が中心商店街を練り歩く行灯パレードや、商工会主催の大抽選会、花火大会などが開かれる。日曜日の本祭は常呂川河川敷にある末広多目的広場の深緑の芝生の上で開催。青年4団体が行う各種イベントをはじめ、特設ステージでは恒例となっている人気歌手による歌謡ショー、お笑い芸人等によるステージショーが開催され、歌と笑いで大いに会場が盛り上がる。会場内には、女性・青年団体などによる食べ物やゲームコーナーなどの出店があり、焼き肉コーナーが人気を集める。例年約12,000人の集客がある。

～主な事業・取り組み等～

【まちづくりパワーアップ特別対策事業】

町民税の1%を活用し、町民がさまざまな形で地域づくりに関わる元気な町を目指し、コミュニティの活性化や町民の自主的な活動を支援する。

【高齢者ハイヤー利用サービス事業】

75歳以上の町民を対象とし、町内移動のためにハイヤーを利用した場合、一律300円で利用できる制度。300円を超えた運賃は町が負担する。

【路線バス高齢者利用支援事業】

75歳以上の町民を対象とし、路線バスの一定区間を一律300円で利用できる制度。300円を超えた運賃は町が負担する。

【空き家活用事業】

定住や移住を希望される方に空き家情報を提供する「空き家バンク」を設置するとともに、空き家バンクを利用して成立した売買、賃貸を対象に空き家の購入や改修などに要する費用として最大300万円を補助する。

【店舗出店等支援事業】

店舗の新築、空き店舗の活用により新たに営業をはじめ事業者の方に店舗建築、購入、改修などに要する費用として最大300万円を補助する。

【町民参加のまちづくり】

条例制定、まちづくり推進会議

おけとちょう
置戸町



- [所在地] 〒099-1100
常呂郡置戸町字置戸181番地
- [電話番号] 0157-52-3311
- [FAX番号] 0157-52-3353
- [ホームページ] <http://www.town.oketo.hokkaido.jp/>
- [市町村コード] 015504
- [開基年月日] 大正4年4月1日（開町年月日）
- [市町村名の由来]
アイヌ語の「オケトウンナイ」（鹿の皮を乾かすところの意）より転じたもの。
- [市町村章の由来]
オキトを図案化し、大きな木のある山を表し、森林の町おけとを象徴したものである。

[歴史]

町名は、アイヌ語の「オケトウンナイ」（鹿の皮を乾かすところ）に由来するように、先住民族の時代には著名な鹿狩り場であったらしい。また、先史人の生活の場であったことを示す旧石器や新石器類も、安住遺跡を中心に常呂川流域の大地から広く発掘されている。明治16年、常呂村ほか6村戸長役場が常呂村に置かれると、置戸はオケトウンナイと称しその管轄となるが、最初の定住者は同31年のことである。明治41年野付牛（現北見市）－置戸間道路、同44年池田－野付牛間の網走本線（旧銀河線）の開通を契機に、団体移民による開拓や豊富な木材資源をもとめて入地する者が激増し、大正4年に野付牛村から置戸村が分村独立した。戦後昭和25年に町制を施行したが、同29年の台風15号で約400万石の風倒木を出し、その処理のため増加した人口も、昭和35年の13,200人台を境に減少を続けている。しかし、社会教育のまちとして活発な活動を続けるとともに、基幹産業である農林業の生活基盤整備や生活環境の整備を促進して「自然を愛し、人にやさしいまちづくり」を目指し、明るく、豊かな、住みよい郷土づくりへの歩みを続けている。

[産業]

《農業》 平坦地が少なく耕地面積は総面積の9.1%であるが、生産性向上のため農用地開発をはじめとする土地基盤整備事業が積極的に進められている。基幹作目は、玉ねぎ、馬鈴しょ、てん菜、菜豆などであるが、作付面積の約6割は飼料作物である。今後のT P Pの動向や農業の国際化や生産調整など内外をめぐる厳しい情勢に対応できる体制づくりをめざしている。

《林業》 総面積の80%は森林で、これらを背景に林産工業が町の基幹産業となっている。私有林は森林面積の15%であるが、林業構造改善事業を促進して生産性の高い林業の確立をめざしている。また、平成20年度に取得した森林認証によって、そこから生産された木材を地場産材として付加価値の向上を図り、いっそうの普及と利用をめざしている。

[文化・観光]

オホーツク海に注ぐ一級河川『常呂川』の最上流部のまち置戸町。昭和58年に完成した『鹿ノ子ダム』によりできた山々に囲まれたおけと湖は、四季折々の彩りを映し出し、ワカサギやヤマベ、ニジマスをねらって、多くの釣り人が訪れています。名勝『鹿の子沢』には名木『三本桂』、『虹の滝』等があり、風景林として、手軽に森林浴を楽しめる散策コースが整備されています。また、道有林内にある『風穴』にはナキウサギが息しています。

エゾ松・トド松の美しい木目や、センなどの広葉樹の柔らかな質感を生かしたオケクラフト。『森林工芸館』では、展示販売施設の機能と作り手養成施設の機能を兼ね備えています。

『勝山温泉ゆうゆ』では、露天風呂やジャグジー、サウナを備え、ゆったりと自然の中で温泉を楽しめます。また、4棟のコテージは天然温泉付きのプライベートな宿泊施設として好評です。

置戸の厳しい自然の中で育ったぶどうでつくられた『おけとオリジナルワイン 炎の里』や『白花豆焼酎おけと』等、地場の農産物を生かしたお土産物も豊富です。

[イベント]

おけと夏まつり 「人間ばん馬大会」

(7月上旬)

おけと夏まつりの中で最大の催物「人間ばん馬大会」。全長80mのコースに2ヶ所の障害があり、太い丸太を積んだ鉄ゾリを5人で引き、速さを競う。予選300キロ、決勝500キロを引く勇者達の姿が北の大地に熱く燃え上がる。

おけと湖水まつり

(7月下旬)

鹿ノ子ダム『おけと湖』湖畔で、カヌー・釣り・流木アート・飲食コーナー等、大自然の中で1日ゆっくりアウトドア体験を満喫できます。

もっと馬力 だすべえ祭

(9月下旬)

「地域に根ざした文化や特産品で、地域の活力を」とおなかいっぱいの食べ歩きグルメや子どもから大人まで楽しめるイベントが盛りだくさん。

～まちの施策・計画等～

【第6次置戸町総合計画によるまちづくり】

本年度より、今後10年間のまちづくりの指針である第6次置戸町総合計画によるまちづくりが始まりました。

本町の豊かな自然と常呂川の清流に育まれるまちとして、町民一人ひとりが、わが町や地域への愛着や誇りを持ち、町民と行政が手を取り合い、果敢に新しいことに挑戦し、新たな魅力を作り出す取り組みによって、あらゆる世代の人が生涯健康で活躍できる置戸町を築いていくことを目指し、まちの将来像である「笑顔と夢を未来につなぐまち おけと」の実現に向けて取り組みを進めています。

【置戸町まちづくり基本条例に基づくまちづくり】

置戸町のまちづくりの礎となる本条例により、町民・議会・行政各々の役割と責任を明確にするとともに、置戸町が目指すまちのあるべき姿をより具体化し、町民が主体となるまちづくりに繋げています。

■令和2年度に実施された主な事業等

【生活支援】

新型コロナウイルス感染症の影響により収入減少が見込まれる世帯に対して、国民健康保険税の減免を行う等、様々な支援を行いました。

【防災体制】

防災の意識を高めるため、置戸小・中学校、置戸高校へ防災備蓄品を提供し、防災給食を実施しました。また、段ボールベットやポータブルトイレなど防災備蓄品を充実させました。

【商工業の活性化】

新型コロナウイルス感染症の影響により売り上げが減少している事業者に対し、事業継続給付金の支給を行いました。また、置戸町コロナに負けるな生活応援事業として町民1人につき5,000円の町内限定の商品券を2回発行しました。

【教育支援】

道内唯一の福祉科程を有する置戸高等学校への各種支援の外、給付型奨学金「福祉の夢」サポート奨学金制度を継続しました。

さろまちょう
佐呂間町



- [所在地] 〒093-0592
常呂郡佐呂間町字永代町3番地の1
- [電話番号] 01587-2-1211
- [FAX番号] 01587-2-3368
- [ホームページ] <http://www.town.saroma.hokkaido.jp>
- [市町村コード] 015521
- [開基年月日] 明治27年
- [市町村名の由来]

アイヌ語の「サロ・オマ・ペット」（葦のあるところの川）、「サラオマ」（葦のあるところの沼）からサロマとなり、大正4年に佐呂間と和文に転用。

- [市町村章の由来]

仮名文字「サ」が「ロ」と「マ」を囲むように図案化。横線が、全町を固く結んだ町民の心、一致団結、共存共栄、円満な理想郷を表している。

[歴史]

明治16年、常呂郡を一円として常呂浜に常呂村外六ヶ村戸長役場が設置されてその傘下に入り、明治30年、常呂村外四ヶ村戸長役場を経て、大正3年4月、中佐呂間に鑑沸村戸長役場が設置され、常呂村から分離独立し、翌大正4年には、2級町村制を施行して村名を佐呂間村と改称。昭和11年10月、湧網西線鉄道の開通を契機に大きく成長し、昭和18年、1級町村制を施行、昭和23年、若佐村を分割独立させたが、31年の町村合併促進法によって再び合併、昭和28年4月1日、町制が施行され現在に至る。平成6年に開基100年を迎え、盛大な記念式典・記念行事が行なわれた。

[産業]

《 農業 》 本町では寒冷地農業基盤を確立するため、田畑作経営から酪農経営への転換を図り、現在約8,800頭の乳牛と約18,000頭の肉牛を有し、畑作を兼ねる複合経営を主とし1年を通して収入源を確保している。比較的長い日照時間と昼夜の寒暖差が激しいオホーツク特有の気候に恵まれ、小麦、てん菜を中心とした作物やカボチャ等の特産品で、安定した収穫高を誇っている。また、農業の持続的な発展を図るため、土づくりを基本とした農業生産基盤の整備・維持、営農用水施設の整備、農業経営基盤の強化等積極的に推進している。

《 林業 》 56%を占める森林地域を有する本町の林業は、森林整備計画に定める基本的事項を基に森林が持つ公益的な機能を充実させ、地域の生活環境にも配慮するとともに、地域の人工林の保続を図りながら低コストで効率的な森林整備を進め、安定的な木材供給を図りながら資源の循環活用を進め、守り・育て・創造する林業を推進している。

《 水産業 》 オホーツク海に接しサロマ湖を有する本町は、この絶好の立地条件を生かした漁業が盛んである。全国に先駆けて栽培型漁業を始めた地域であり、特にホタテやカキは養殖許容量を定め、過密栽培の防止と湖の水質管理を行い安定生産を続けている。オホーツク海ではサケ・マスなど魚種豊かな海の幸が水揚げされている。

《 商工業 》 人口減少による購買力の低下や都市部への消費者流出など地元消費が伸び悩む中、プレミアム付商品券発行事業や住宅建設促進事業等により消費需要の喚起と個人消費の拡大を図るとともに、商工業の経営活性化及び起業促進のため、施設整備費や新商品の開発費を助成する商工業活性化事業により、地域の活性化及び商工業の振興・発展に努めている。

[観光]

網走国定公園の北側に位置する本町は、北海道で1番、日本で3番目に大きいサロマ湖を有し、サロマ湖沿いの原生林を縫うように整備された湖畔遊歩道、幌岩山の麓からサロマ湖展望台へ続く登山遊歩道、日本屈指の夕日と称えられるキムアネップ岬の夕日と大地を赤く染めるサンゴ草群落など雄大なサロマ湖と自然を満喫できる。中でもサロマ湖展望台からの眺めは絶景でサロマ湖の全貌はもちろんのこと、サロマ湖とオホーツク海を隔てる砂嘴のつながり、果ては知床連山まで望むことが出来る。

[イベント]

「シンデレラ夢」 (さろまカボチャまつり)

(9月第1土・日曜日)

夢のある「まち」という大きなテーマに立ち向かい、まちの青年を中心に子供からお年寄りまでがこぞって参加できるまつりとして開催。前夜祭は仮装パレード・花火大会などが、当日はかぼちゃの大きさを競うパンプキンコンテストや、コンサート、ゲーム大会などが行われる。

サロマ大収穫祭

(10月第1日曜日)

農・林・水産業の一年の収穫に感謝し、町の特産品等の特価販売を行うお祭りで、ホタテ浜焼き、ジャンボバーベキュー、かぼちゃ団子等の地場産品を味わうことができる。また、ステージショーや抽選会などの催しが行われる。

～主な事業・取り組み等～

【佐呂間町サポーターズ倶楽部事業】

平成27年から、町外に居住し佐呂間町に興味・関心を持っていただける方を「佐呂間町サポーターズ倶楽部」の会員として登録してもらい、居住する地域において、本町のPRなど、佐呂間町を応援する役割を担っていただくとともに、会員へまちの魅力や特産品などの情報提供を行い、交流人口の増加や消費拡大による地域振興を図っています。

【地域担当員制度】

平成19年度に「地域担当員制度」を設け各自治会単位で町職員を配置し、地域への情報提供、連絡調整を密にすることにより、地域と連携した災害時の援護活動や地域の実情に応じた活動支援と地域課題の早期解決に努めています。

【姉妹都市・地域間交流】

昭和55年、民間人同士の無線交信をきっかけに、アメリカ合衆国アラスカ州パーマ市と姉妹都市提携を締結。今後においても、交流が益々発展していくよう努めています。

また、平成20年には東京都港区並びに港区三田商店街、佐呂間町商工会そして佐呂間町の4者により「商店街友好都市との交流に関する基本協定」、さらに平成26年には宮崎県都農町と「北海道佐呂間町と宮崎県都農町の経済交流に関する基本協定」が結ばれ、人的交流も含めて経済交流が進められています。

【ふれあいバス運行の充実】

民間バス路線の廃止に伴い、平成22年10月から「ふれあいバス」の運行を開始しました。

ふれあいバスは、町内における高齢者の通院や買い物、高校生の通学及び町外医療機関への交通手段対策として、既存のスクールバスを活用した佐呂間町独自のバス路線です。今後も更に町民の利便性に配慮したバス路線とするため、バス運行体制の充実に努めています。

【福祉・医療施策の推進】

平成23年5月に「佐呂間町高齢者あんしんネットワーク会議」を設立して、多面的な高齢者支援に地域をあげて取り組んでいます。この取組の一環である「佐呂間町高齢者あんしんQRコード事業」では、高齢者の情報を入力したQRコードを利用してバッチやカードを作り、希望する高齢者に無料配布しています。

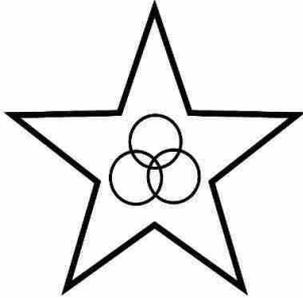
保健予防施策としては、町民の健康づくり行動変容効果を期待した「サロマガンキマイレージ事業」に取り組んでいます。

また、平成26年4月、町立診療所「クリニックさろま」が開設され7年が経過、疾病予防・早期発見に努め、地域住民の健康維持、増進に取り組んでいます。

【子育て支援】

平成28年から、子育て世帯の負担軽減を目的として、町内保育所に在籍する児童の保護者に対し、保育料や遠距離通所に要する費用の一部を助成しています。

えんがるちょう
遠 軽 町



[所在地] 〒 099-0492
紋別郡遠軽町1条通北3丁目1番地1

[電話番号] 0158-42-4811

[F A X 番号] 0158-42-3688

[ホームページ] <http://engaru.jp>

[市町村コード] 015555

[開基年月日] 明治30年5月7日

[市町村名の由来]

アイヌ語の「インガルシ」（見晴らしのよいところの意味）より転訛したもの。

[市町村章の由来]

外側の星型は、北海道の北見国を北斗星で表わし、その中央に三つの輪を配して、真ん中の輪を「天の時」、右を「地の利」、左は「人の和」とし、地方自治体の基本は、三和主義による理想郷にあることを意味したものの。

[歴史]

明治30年5月7日、北海道同志教育会の創設により、「理想郷建設」を夢見た移民集団が入植し、開拓が始まった。

原野の開発、道路の開削、駅通所・人馬継立所の設立、湧別鉄道の全通等により入植者が増え、大正8年4月1日二級町村制施行により、上湧別村から分村し遠軽村となる。

大正14年1月1日、遠軽村から生田原地区が分村し生田原村となり、遠軽村は、昭和9年4月1日に、一級町村制施行により遠軽町となった。

昭和21年8月1日には、丸瀬布地区と白滝地区が分村し、丸瀬布村、白滝村となり、丸瀬布村は、昭和28年10月1日町制施行により丸瀬布町となった。また、生田原村は、昭和29年4月1日に町制施行により生田原町となった。

近年の行政の様々な変化に対応するため、平成15年5月14日にかつて同じ遠軽村であった遠軽町、生田原町、丸瀬布町及び白滝村による遠軽地区4町村合併協議会を設置し、約1年半の協議の末、平成16年11月19日に合併協定書に調印、平成17年10月1日、時代の要請とさらなる発展を目指し、新「遠軽町」となった。

[産業]

《 農業 》 湧別川・生田原川沿いの山間地で、積雪寒冷の厳しい条件の下、寒冷作物を中心とした畑作・酪農・畜産を営んでいる。

畑作では、小麦、てん菜、かぼちゃ、馬鈴しょ、スイートコーンの他、施設園芸作物として、立茎アスパラガスやいちごの高設栽培等、高収益作物（青しそ）の栽培にも取り組んでいる。

酪農・畜産は全農家数の70%を占めており、酪農においては、搾乳ロボット、哺乳ロボット、自動給餌機などの省力化機械を導入し、近代型酪農による規模拡大が図られている。また、農業担い手の育成・確保対策により持続可能な地域農業の確立に積極的に取り組んでいる。

《 林業 》 本町の面積の約88%は豊かな森林でおおわれており、森林面積の約84%が国有林である。また、全森林面積の約33%は人工林であり、基幹産業としての林業の振興及び環境の保全を図るため、森林整備計画により人工造林、間伐等の森林整備を進めている。

《 商業 》 遠軽町内各地域における中心市街地の活性化と魅力ある商店街の環境づくりに努めるとともに、商工会議所や商工会を中心とした指導体制の下、商業活性化のための中小企業の育成、援助を進めている。

《 工業 》 地域の豊富な地場資源を活用した木材工業や食品加工業が行われている。また、地場資源による地域性・独自性のある産品開発に取り組むとともに、それら地場産品の販路拡大を目指し、物産協会を中心とした物産展を実施するなどしてPRに努めている。

[文化・観光]

遠軽町は、豊富な湯量と泉質を誇る温泉があり、四季を通して人々を楽しませる素晴らしい景観、そして、国指定の名勝や重要文化財、史跡など、数多くの魅力ある資源を有している。

遠軽地域には、町のシンボル「瞰望岩」があり、アイヌ語で「美しい・形」を意味する「ピッカノカ」として国指定名勝となっているほか、周辺には日本最大級の規模を誇るコスモス園太陽の丘えんがる公園「虹のひろば」があり、秋には色とりどりのコスモスが園内に広がっている。また、道内では唯一、スキー場を併設した道の駅「遠軽 森のオホーツク」では、地元食材を使ったフードメニューや地域の特産品を揃えているほか、様々なアクティビティを楽しむことができる。

生田原地域には、世界の木のおもちゃをそろえた「ちゃちゃワールド」（藤城清治影絵美術館併設）や、オホーツク圏に関係する著名な作者の作品等を展示した「オホーツク文学館」などがある。

丸瀬布地域には、近代化産業遺産、北海道遺産の森林鉄道蒸気機関車「雨宮21号」が力強い走りを見せる丸瀬布森林公園「いこいの森」や、生きた昆虫や蝶が舞う姿を観察できる「昆虫生態館」などがあり、地域ごとに魅力あふれる施設がそろっている。

白滝地域には、国内最大級の黒曜石産地「赤石山」や、国指定史跡の「白滝遺跡群」などがあり、「白滝ジオパーク」として日本ジオパークの認定を受け、国の重要文化財指定の貴重な黒曜石出土品などを展示する「遠軽町埋蔵文化財センター」とあわせて、旧石器時代からの歴史をたどる貴重な展示物を見たり、石器づくりなどの体験学習もできるほか、黒曜石産地「赤石山」を見学するジオツアーなど魅力あふれる体験ができる。

冬は、国内最長コースの湧別原野オホーツククロスカントリースキー大会や厳冬の山彦の滝観察会など、年間を通して、観光客を優しく迎えている。

[イベント]

湧別原野オホーツク
クロスカントリー
スキー大会
(2月最終日曜日)

遠軽町と湧別町にまたがるクロスカントリースキー大会は、個人5～80kmまでの6種目と、5人で95kmをつなぐスキー駅伝が行われる。

ヤマベまつり
(7月中旬日曜日)

生田原福祉センター前駐車場において、「ヤマベのまち」にふさわしく、ヤマベ釣り大会やヤマベのフライが食べられるビアパーティなど、盛りだくさんのイベントが繰り広げられる。

まるせつぷ
観光まつり
(8月第1土・日曜日)

丸瀬布森林公園「いこいの森」において、花火大会、チビッ子トンカチ教室、水上アスレチック、ヤマベ・ニジマスつかみ取り等の手作りイベントが多数行われる。

アンジくんのふるさと
まつり
(8月下旬)

白滝総合支所内特設会場において、トラクター引き競争をメインに各種イベントや特産品の販売、花火大会などが行われる。

太陽の丘コスモス
フェスタ
(9月)

太陽の丘えんがる公園「虹のひろば」において、約10haの広大な花畑に咲く約1,000万本のコスモスを観賞しながら、コンサートのほか、食べる、遊ぶなど楽しいイベントが行われる。

～まちの施策・計画等～

遠軽町は、平成17年10月1日に町村合併をして10年、さらに次の10年に向け、これからも安定的な行財政運営を行いつつ、この地方の中心地として在り続けるために、町と町民が目的と情報を共有しながら、互いの立場を尊重し、協働してまちづくりを進めていくとともに、近隣の市町村などと連携したまちづくりを進め、町の将来に夢や希望を抱きつつ、「ふるさと遠軽」を誇りに思う強い絆で結ばれたまちづくりを目指すことを基本理念としています。

この基本理念を踏まえ、「森林(もり)と清流(みず) つくる・つながる にぎわいのまち」として掲げた第2次遠軽町総合計画を平成27年7月に策定しました。

「人と自然に思いやりのあるまちづくり」、「安全・安心で住みごこちの良い暮らしの場づくり」、「活気と創造性にあふれ、未来につながる産業づくり」、「住み慣れたところで健やかに暮らせる生活づくり」、「文化を守り、未来につなげるふるさとづくり」、「町民と町が気軽に対話できるまちづくり」の6つを計画の体系とし、恵まれた自然環境を大切に守り、生かしながら、さまざまな”つながり”を大切にし、笑顔と元気とやさしさにあふれた、にぎわいのある町を”つくる”という思いをより一層強く持ち、まちづくりを進めていくこととします。

ゆうべつちょう
湧別町



- [所在地] 〒099-6592
紋別郡湧別町上湧別屯田市街地318番地
[電話番号] 01586-2-2111(代)
[FAX番号] 01586-2-2511
[ホームページ] <http://www.town.yubetsu.lg.jp/>
[市町村コード] 015598
[開基年月日] 旧上湧別町 明治30年9月30日
旧湧別町 明治15年

[市町村名の由来]

「湧別」とはアイヌ語の「ユペ」から出たものと言われ、鮫を意味し、鮫（アイヌ人は鮭のことを鮫と言った）の多いところから名付けられた。

[市町村章の由来]

湧別町の「ゆ」をモチーフとし、中央に輝く五光星は、北海道開拓精神のシンボル、そして人と自然が輝くオホーツクのまちの将来像を表現しています。使用色の青は雄大なオホーツク海を、緑で表現した星は豊かに実る農地の作物を表しています。

[歴史]

開基は、明治15年に湧別原野に農耕の一畝を入れて原野開拓の祖となり、これが湧別町の開基となった。明治39年戸長役場が廃止され2級町村制施行、湧別村役場を設置、明治43年に6号線以南の区域を上湧別村に分村、湧別村を下湧別村と改称、昭和28年に湧別町となる。同年上湧別村も町制を施行し上湧別町となる。

市町村を取巻く情勢が大きく変わりつつある中、先人により培われ受け継がれた開拓の歴史・伝統を尊重し、両町民が共栄共助の精神で生活と文化、産業を営むことが出来る『人と自然が輝くオホーツクのまち』を目指し、平成21年10月5日、上湧別町・湧別町が合併し、新「湧別町」となった。

[産業]

- 《農業》 湧別原野の肥沃な大地が広がる本町では、玉ねぎをはじめ小麦、てん菜、馬鈴しょ、南瓜、ブロッコリーなど、寒冷地に適した作物を基幹とする野菜複合農業とオホーツク管内一の生乳生産量を誇る酪農主産地として酪農業が展開されている。
- 《水産業》 ホタテ、カキなどの生産基地として「つくり育てる漁業」を推進し生産性の拡大を図っている。さらに漁業関連施設の整備、沿岸漁場の造成により、水産資源の増大と漁業活動の振興を図っている。
- 《林業》 総面積21,533haと広範な森林地域を有する本町は、森林資源の維持・増進整備充実と活力ある山林の育成を図るため、森林整備事業など各種の事業による林道の整備、造林及び育成事業の積極的な振興を図っている。
- 《商工業》 商業は中湧別・上湧別・湧別の3地区でそれぞれ商店街が形成されており、消費者ニーズに対応した利便性の高い商店づくりを目指している。工業は、農林水産物を活用した製造業が多く、第一次産業と密接な関係を持ち、付加価値の高い製品開発等を促進している。

[文化・観光]

北海道最大、日本でも琵琶湖、霞ヶ浦に次ぎ三番目の大きさを誇る網走国定公園サロマ湖を有する本町は、自然と歴史のスクランブルタウン。サロマ湖とオホーツク海は、天然の長延な砂州で境をなし、雄大な外観を誇る龍宮台からの眺めは、訪れた人に感動を与えている。春には国道242号線に面した「チューリップ公園」でおよそ200品種のチューリップが咲き誇り、道内外から多くの観光客を集め賑わいをみせている。

[イベント]

かみゆうべつ チューリップフェア

(5月1日～6月上旬)

70,000㎡の公園に約200品種のチューリップが咲き誇るお祭りです。例年5月20日頃に見頃を迎え、色とりどりのチューリップの絨毯は圧巻です。

チューリップフェア期間中にはチューリップ掘り取り体験や球根の予約受付、園内周遊バスの運行、ストリートオルガンの演奏などが行われます。

屯田七夕まつり

(7月下旬)

七夕あんどんに覆われた美しい雰囲気の中、屯田兵行進、長なわとび大会、花火大会、ビンゴなど各種イベントやビール、焼き鳥などの露店も出店する。

湧別町産業まつり

(9月秋分の日)

本町のローカルヒーロー『湧別戦隊産業レンジャー』が悪のヒトデマンと戦うショーが子どもたちの間で大人気。海産物即売会、農産物即売会、鮭のいけどり大会、人間ホタテ引き大会、湧別の特産物を使用した「湧別鍋」コーナーなど、様々な催しが行われ秋の豊漁・豊作を祝うイベントである。

～まちの施策・計画等～

【第2期湧別町総合計画の策定】

第1期計画から引き継いだまちの将来像である『人と自然が輝くオホーツクのまち』の実現を目指し、人と人、組織と組織のつながりやそこから生まれる交流から活力を見出し、湧別町の豊かさを町内外に実感してもらえるよう『つどい、つながり、磨き上げるまちづくり』を基本理念とし、第2期となる総合計画を策定しました。平成29年度から令和3年度までの5年間、「安全で安心して暮らせる快適なまちづくり」・「豊かな自然と共生する活力あふれるまちづくり」・「健やかにいきいきと暮らせるぬくもりのあるまちづくり」・「心の豊かさと生きる力を育むまちづくり」・「人がふれあい支え合う安定したまちづくり」の5つを基本目標とし、さまざまな分野における施策を推進します。

～まちのPR～

オホーツク海とサロマ湖を有し、毛がにやホタテ、牡蠣などの海産物が豊富です。また、畑作や酪農業も盛んで、おいしい牛肉や新鮮な野菜も堪能できます。

観光施設も充実しており、春は色鮮やかなチューリップの公園、夏と秋には海と山それぞれにあるキャンプ場でのアウトドアや、遊園地「ファミリー愛ランドYOU」、上湧別リバーサイドゴルフ場でのレジャー・スポーツ、冬は龍宮台展望公園で流水鑑賞など、四季を通して楽しめる町です。



たきのうえちょう

滝上町



[所在地] 〒099-5692

紋別郡滝上町字滝ノ上市街地4条通2丁目1番

[電話番号] 0158-29-2111

[FAX番号] 0158-29-3588

[ホームページ] <http://www.town.takinoue.hokkaido.jp/>

[市町村コード] 015601

[開基年月日] 明治38年

[市町村名の由来]

渚滑川には数多くの滝があり、滝上市街地がその上部に位置するところから「滝上」となる。

[市町村章の由来]

四つの円を用い「タ」「キ」「上」を組合せて図案化したもので、下の三角形は山を表わし、小円は農耕地を表わす。即ち農林立町の町是を表徴したものである。

[歴史]

紋別郡が開拓使根室支庁の管轄に入り、紋別郡管内10村の村名が定められた明治5年には、町の区域は渚滑村に属していたが、町の地域に定住する者はなかった。人が来住し漁猟に従事するようになったのは明治33年頃からと伝えられ、留萌出身のアイヌ人柳田初太郎氏の名前が残されている。

本州方面から開拓を目的として入地してきたのは、高知県出身の西森亦吾氏で、明治38年上渚滑原野52線（現滝下）に開墾の鍬をふりおろしたことに始まった。

大正7年渚滑村から分村し滝上村となり、昭和22年町制が施行され滝上町となる。平成30年には、滝上110年祭の記念式典が行われた。

[産業]

《農業》 主に畑作、酪農、肉牛の経営形態からなっており、作業の効率化と生産性の向上を図るためコントラクター事業の取り組みや生産者の法人化の推進に取り組んでいる。また、堆肥の有効利用を図るため耕畜連携のもと地域内循環による円滑な土づくりも積極的に進めている。

《林業》 町の森林面積は約69,000haで、行政区の90%を占めている。本町の豊かな森林資源の循環利用を推進するため、民有林の整備及びその促進につながる取組を計画的かつ効果的に進め、森林系バイオマスの活用による、環境にやさしい林業振興を目指している。

《商業》 町内には約50店ほどの商店があり、小売業が中心となっている。人口の減少などの要因により商店の減少がみられるが、はっか、チーズ等の地場産の農林産物などを利用した商品開発が行われている。

《工業》 町内には11事業所があり、木材、木製品、食料加工品など地場資源活用型の産業になっている。

[文化・観光]

滝上町は、「童話村」をテーマとする町づくりを進めている。文化面では、図書館の絵本・児童書コーナーの充実、絵本作家招聘事業、絵本原画展、ブックスタート事業などのほか、郷土出身童話作家加藤多一さんによるおとなのための読書会や、町民有志による郷土出身作家小檜山博さんの文学記念碑の建立、小檜山博文学館が開館されるなど文化性の高い環境づくりを進めている。

日本一の景観を誇る芝ざくら滝上公園の「芝ざくら」の群落や、市街地を流れる渚滑川の渓谷は絶景で毎年約5万人の観光客が訪れる。また、渚滑川で「キャッチアンドリリース」を呼びかけたスポーツフィッシングや、渓谷遊歩道のウォーキングにも力を入れている。安心、安全で、「文化」の見える中に優しさのある観光を目指している。

[イベント]

芝ざくらまつり

(5月上旬～6月上旬)

芝ざくら滝上公園は、市街中心部を見渡す丘陵地にあり、その斜面10万平方メートル一面にピンクの芝ざくらが咲き誇る。甘いふくよかな香りが町中に漂いはじめるこの季節、芝ざくらの群落を一目見ようと、全国各地からたくさんの観光客が訪れ町中が一段と賑う。このまつり期間中は、たくさんのイベントが行われる。

～まちの施策・計画等～

滝上町は、平成2年度から「人いきいき・町わくわく『童話村』たきのうえ」をテーマにまちづくりを進めてきました。童話村構想は、住民が主体性・生きがいを持っていきいきし、訪れる人がわくわくする、ふるくてあたらしく、過去・今・未来を見据えた長期的なまちづくりを目指しています。

令和元年度からの「第6期滝上町総合計画」では、滝上町にこれからも安心して暮らし続けるために、住民と行政がどのような方向でまちづくりを進めていくかの4つの重点施策を示しました。限られた財源の中で持続するまちづくりを進めると同時に、「童話村構想」にもある「人がいきいき」とこの町で暮らし続けるため、町民、企業、行政が力を合わせてまちづくりを実施していきます。

【重点施策】

1 「くらし」

医療・福祉体制の維持・強化、交通環境の充実、安全安心なまちづくりの推進により、転出人口を抑制し、定住人口の増加を図ります。

2 「担い手」

既存の森林資源や希少価値のある農産物等を活かし、産業の担い手の確保育成を図り、2次産業、3次産業の発展向上と新規就業の増加など、雇用の創出を目指します。

担い手確保は、企業や団体単位での確保が難しくなっており、産業単位あるいは、町全体で確保する対策の実施が必要です。

多様な働き方ができる仕組み、分業体制の確立、地域おこし協力隊制度を活用した担い手確保、高齢者や外国人の雇用など、官民連携による取組を推進します。

3 「交流」

芝ざくら滝上公園をはじめとする滝上の観光資源を活かしながら、国内外からの観光客を誘客し、交流人口の拡大を図り、来訪をきっかけとした将来の移住・定住に結びつけることを目指します。

そのために住宅を確保し、町内での交流機会をつくり、地域コミュニティ等の再生を図り地域の魅力を高めます。

4 「子育て」

質の高い教育環境の提供、子育て支援の充実と町内外への情報発信、さまざまな出会いの機会づくりにより、安心して結婚・出産・子育てが実現できる環境づくりを目指します。

おこっぺちよう 興部町



- [所在地] 〒098-1692
紋別郡興部町字興部710番地
- [電話番号] 0158-82-2131
- [FAX番号] 0158-82-2990
- [ホームページ] <http://www.town.okoppe.lg.jp>
- [市町村コード] 015610
- [開基年月日] 明治22年
- [市町村名の由来]

アイヌ語「オウコッペ」より転訛したもので「川尻の合流しているところ」の意であり、当時興部川、藻興部川が合流しオホーツク海に注いでいたところからこのように呼んだものである。

[市町村章の由来]

輪郭の「北」の3文字は、北見を表し、緑の色彩は、平和にして、発展の状態を表す。中央の「興」の字は本町名の頭文字をとり真紅の色彩は赤誠と熱意を表したものである。

[歴史]

貞享年間（1684～1688年）に松前藩の所領として宗谷場所が開設され、明治22年藤野四郎兵衛氏が沙留に漁場を設置、支配人等を越冬させたのが開基の始まりで、同42年雄武から興部村外2村戸長役場として分立した。大正4年北海道2級町村制が施行され興部村となる。大正14年興部村から西興部村を分村、農林・漁業商工業の活況を見た。昭和2年市街地の3分の1を焼失する大火に見舞われたが、戦前戦後の開拓者の入植により人口が増加し、昭和26年に町制を施行。基幹産業である農業も冷害に強い酪農に転換が図られ、道内屈指の酪農郷に躍進している。また、漁業もオホーツク海の恵まれた環境を生かした栽培漁業（ホタテ）が定着しつつあり、昭和63年には、開基100年を迎え町民こぞって記念すべき年を祝った。平成20年からは、バイオマスを活用して家畜排泄物の発酵処理を行うと共に、エネルギーの地産地消や新たな産業づくりを目標にバイオマスタウン構想を策定し、平成26年にはバイオマス産業都市に認定される。

[産業]

《農業》 酪農専業地域へと転換して以来、土地資源を背景に積極的に土地基盤整備を導入し規模拡大を図り、近代的な農業経営を進めてきた。また、自家生産物を用いた牛乳・ヨーグルト・チーズ・アイスクリーム等の製造・販売による経営の多角化と、家畜排泄物を利用したバイオガスプラントの整備により経営の安定化に取り組んでいる。

《水産業》 オホーツク海のブランド品であるホタテ・毛ガニ・アキアジ・マス等の沿岸漁業中心の基幹産業で、水産加工業などの関連産業への波及効果も大きく地域経済の活性化を図っている。特に、ホタテ・アキアジ・マスの安定供給を目的に資源培養と増養殖管理体制の推進し経営の安定を図っている。

《林業》 森林は国土保全、水資源の涵養及び快適な生活環境の保全等に資する機能を有しており、今後、伐期を迎える森林も多く存することから林業生産活動を通じた適切な森林整備を図るとともに、環境に優しい計画的な伐採と植林を推進し公益的機能・増進するよう努めている。

《商業》 商店の活性化と地元購買者を確保し、特産品のPRと販売促進を図るため、広報・宣伝活動及び地元商品券の有効利用を積極的に推進している。

[文化・観光]

オホーツクライン観光の中間地点に位置し、紺碧のオホーツク海と緑豊かな大地に草を食む牛の群は雄大で、ヨーロッパの牧歌的風景が再現されている。夏は海水浴、海づくり、冬は流水が訪れ、白銀の世界となるなど、変化に富んでいる。先住民族堅穴住居跡豊野地区の海岸地点（13ヶ所）と丘陵地点（27ヶ所）に道指定による堅穴がある。沙留海水浴場は、オホーツク海特有の蒼紺・遠浅の砂浜、場内が岩で囲まれるなど自然条件に恵まれており、海の家キャンプ場などの施設が整備され家族ぐるみで楽しめる。国道238号線沙留から渚滑間の湖畔橋附近は釣り釣りに最適で、毎年近郊の町から太公望が多数訪れる。

[イベント]

おこっぺ夏まつり

(毎年8月
第1土・日曜日)

納涼の時期町民がこぞって参加する町的一大イベントである。バーベキュー、宝さがしゲーム、生バンド演奏会、花火大会など。

牛乳の里マラソン

(毎年10月第1日曜日)

緑豊かな大地、牛の群、オホーツク海をながめながら、小学生以上の男女が3km、5km、10km、ハーフのコースに挑む。誰でも参加できるマラソン大会。

～まちのPR～

■町づくりの指針

興部町は、平成30年3月に第六期興部町総合計画（計画期間：平成30年～令和9年度）を策定し、目指すべき将来像を『“地域の誇り” 未来の産業を育てる～ひと、まち、自然が調和するまち・おこっぺ～』と定め、将来を担う子どもの育成と安心した老後を図るために、分野毎の6つの基本目標すべてに「未来」という言葉を使い、50年、100年先の産業のあり方を模索し未来の興部の発展に繋げるまちづくりを推進しています。

■市町村の見どころ、地域の話、取り組み等

（興部町の特産品）

興部町は酪農が盛んな町です。オホーツクの冷涼な気候がもたらす上質な空気・水・土壌が、美味しい牛乳を生み出し、またそこから作り出される優れた乳製品がたくさん在ります。数ある乳製品の中でも特にナチュラルチーズの生産が盛んで、それぞれのチーズ工房のこだわりの逸品が町内にして一度に味わえる場所でありませす。

興部町道の駅では、チーズ等の乳製品の他に、興部町でとれた素材をもとに海産物やはまなすジャム、はちみつなど特産品を集めたコーナーを設置し、特産品を通じて町の魅力を発信しております。

（興部北興バイオガスプラント）

平成26年にバイオマス産業都市の認定を受け、平成28年に家畜排泄物によるバイオガスプラントを整備し、発酵処理により生成される液肥は液体肥料として、固形物は戻し堆肥敷料として利用し、酪農生産にどのような効果が生まれるのか分析や検証を進め、安定した生乳生産体制の研究に取り組んでいます。

（バイオマス液体肥料「おこっぺバイオ」の販売）

興部北興バイオマスプラントでは、発酵処理により生成される液肥を牧草畑の肥料として利用していますが、平成30年7月から、一般家庭の菜園や花・樹木の肥料として「おこっぺバイオ」の販売を開始しました。「おこっぺバイオ」は農林水産省の登録を受けている普通肥料です。

（バイオガスからメタノールとギ酸の製造）

大阪大学先導的学際研究機構と興部町は、バイオガスの有効活用技術の開発を目指して令和元年6月に連携協定を締結し、協議・試験を重ねてきました。令和2年7月15日に、家畜ふん尿由来のバイオガスからメタノールとギ酸の製造に世界で初めて成功しました。

にしおこっぺむら
西興部村



[所在地] 〒098-1501
紋別郡西興部村字西興部100番地
[電話番号] 0158-87-2111
[FAX番号] 0158-87-2777
[ホームページ] <https://www.vill.nishiokoppe.lg.jp/>
[市町村コード] 015628
[開基年月日] 大正14年1月1日
[市町村名の由来]
アイヌ語の「オウコッペ」より転訛したもので興部の西方にあるので西の文字を冠したものである。

[市町村章の由来]
全体は西興部の「西」を表し、中心の山形は山村を象徴すると共に人文字を模し、人の和と人材の育成を念じながら、大地に両脚をふまえ、村民が総力を結集して向上しようとするたくましさを表現している。

[歴史]

本村に開拓の鋤(すき)が入れたのは明治37年春、中興部地区に官設の駅通が開設された時とされている。同年秋、名寄からの道路が開通し、本州各地から数多くの入植者が入ってきた。造材を中心に徐々に村はひらけてきたが、大正10年に名寄線が開通すると急速に本村は発展し、現在のような集落が形成され、大正14年に興部村(現在の興部町)から分村した。その後、昭和10年の4,867人を最高に、昭和37年頃まで人口4,000人台を維持したが、農業形態が酪農に移行するにともない過疎化が進み、令和3年1月1日現在1,058人と北海道において3番目に人口の少ない村となっている。

[産業]

《農業》 酪農専業で、乳牛は育成牛を含め3,775頭を飼育している。また、後継者や労働力確保、鳥獣被害対策が求められており、村では担い手の確保、バイオガスプラントによる糞尿処理、粗飼料精算基盤整備などの対策を推進している。

《林業》 村の面積の89%が森林で、道有林が82.4%、民有林は13.3%である。村では森林所有者の負担軽減や優良な森林資源確保、森林の保全整備のため、造林・除伐・保育間伐事業を支援している。

《商業》 独自性や個性化が求められる中、村ならではの産業をつくりだそうと各種取組が行われてきた。現在の特徴的な産業としては、村内に自生する豊富な山菜を生かした加工品の販売、地元の天然マツタケを使った焼酎の限定製造、また鹿肉を活用した食品開発に力を入れる等地域性を生かした商業の創造をめざしている。

[文化・観光]

本村は、天塩岳道立自然公園の東に位置し、ウエンシリ岳や行者の滝、赤岩の滝、黒岩の滝、氷のトンネルなどの景勝地があり、市街地に隣接する森林公園は各種遊具の他、ログハウスなどのアウトドア施設も整備され、市街地の中心には「ホテル森夢」や森の美術館「木夢」などがあり、子供からお年寄りまで楽しめる。

また、道の駅フラワーパーク花夢には、およそ500種類の花が季節を彩り来館者を迎えます。茶室「興楽亭」では、季節ごとに茶会が催されており村民に親しまれている。社会教育施設を利用し、村の資源である木・土・鹿皮を活かし、クラフトマンの育成を行なうなど、ものづくりから生まれる文化を大切に育てている。

[イベント]

氷のトンネル1日開放 真夏でも4℃という肌寒さを感じる涼味満点の氷のトンネル。普段は立入出来ませんが、村商工青年部が中心となり1日限定で開放されます。
(7月最終日曜日)

むら興しまつり 村民こぞって参加する村の一大イベントである。歌謡ショーや各種ゲームの他、バーベキュー、特産物の販売が行われる。
(8月最終日曜日)

ウッディサマースクール・オータムスクール・ウインタースクール 大自然に囲まれた西興部村で自然を満喫しながら、親子で作る楽しさを味わう木工教室。木工教室の合間には、ネイチャーゲームや自然探勝会なども行われる。
(サマー8月上旬、オータム10月、ウインター2月)

～主な事業・取り組み等～

【美しい村づくり事業推進補助金】

村の景観指針に基づき建物の色彩統一など、美しい景観づくりのために村民等が行った事業の経費の一部を助成しています。

【夢のおくりもの事業】

本村に住所を有する方の新生児の誕生に際し、健やかな成長を願うことを目的に、生後100日に名前、生年月日を刻印した木製品を贈呈しています。

【子ども医療費無料化事業】

「0歳から18歳に達する日以降の最初の3月31日」までの子どもさんを対象に、医療費を世帯の所得に関係なく全額助成します。

【乳幼児紙おむつ等購入助成事業】

子育て支援の一環として、乳幼児の紙おむつ等を購入できる引換券（5万円分）を交付しています。

【妊産婦安心出産支援事業・不妊治療助成事業】

妊婦健診や出産のために、産科医療機関までの往復交通費を支援するとともに、不妊治療にかかる治療費の一部を助成します。

【高齢者見守りシステム】

高齢者及び障がい者世帯に対して各種見守りサービスに係る機器類を貸与し、高齢者が安心して生活できる環境づくりを進めています。

- ①緊急通報ペンダント：ボタンを押すと、健康づくり財団に通報。
- ②見守りセンサー：人の動きを感知し、動きが無い場合に自動的に健康づくり財団へ通報。

【在宅元気生活支援事業】

地域でいつまでも元気で生き生きと生活していただくため、通所介護サービス及び訪問介護サービスの利用者負担を助成し、高齢者の方々への在宅支援事業を実施しています。

【西興部村自主放送「NCN」について】

本村では、村内の話題やニュース、イベント、役場からのお知らせなどを盛り込んだ自主放送を制作し、1日3回、1週間毎に番組を更新し、各家庭に放送しています。

【西興部村予算説明書「今年はこんな仕事をします」の発行】

毎年、各家庭に村の予算や、生活と密接なサービスや事業の概要を分かりやすく説明した「今年はこんな仕事をします」を発行しています。

【学校給食無償化】

西興部村立学校に通学する児童・生徒の村内に住所を有している保護者等を対象に学校給食費の全額を支給しています。

【高等学校等通学費等補助金】

バス利用により通学する生徒及び他市町村で下宿等により通学する生徒に対し、費用の一部を補助をしています。

【空家等解体撤去推進事業・快適住宅リフォーム事業】

利活用の難しい廃屋について、撤去を進めていけるよう、解体経費の一部を補助するとともに、村民がこれからも快適に過ごせるように、空家や既存住宅のリフォーム経費の一部を支援します。

【バイオガスプラント事業】

本村の基幹産業である酪農では、乳牛のふん尿処理が課題となっており、バイオガスプラントによる乳牛ふん尿処理システムを導入し得られる、エネルギーや消化液の利活用により酪農家の経営向上に繋げるとともに、地域においては悪臭改善を図ります。

【高齢者運転免許証自主返納補助金】

村内在住の高齢者75歳以上の方で、身体機能・認知機能の低下等、車両を安全に運転する事が困難な状態となり、自ら運転免許証を返納された方に定額の補助をしています。

【高齢者医療通院費助成】

70歳以上の方が西興部厚生診療所、歯科診療所に路線バスで通院する場合に、その運賃を全額支給します。

また、名寄市・紋別市圏内の医療機関を路線バスで受診した75歳以上の方についても、運賃の1/2を月1回分補助します。

【持ち家建設奨励補助金】

村内に住所を有する者又は今後村内に住所を有し居住をしようとする者で、村内に1戸建て及び二世帯の専用住宅を建設する場合、定額200万円を補助します。また、二世帯の場合は100万円、中学生以下の子供1人につき50万円、移住者50万円の加算があり、村指定宅地に建設すると、建設後10年間宅地使用料は無料となります。

おうむちょう
雄 武 町



- [所在地] 〒 098-1792
紋別郡雄武町字雄武700番地
- [電話番号] 0158-84-2121
- [FAX番号] 0158-84-2844
- [ホームページ] <http://www.town.oumu.hokkaido.jp/>
- [市町村コード] 015636
- [開基年月日] 明治33年7月1日
- [市町村名の由来]
アイヌ語「オムイ」の転訛したもので、川尻が塞がる
ところの意。
- [市町村章の由来]
ヲを6つ組み合わせて雪型にし、その中央に北斗星を配
して北見雄武を表したもので、青色は広大な空とオホ
ツク海を象徴した。

[歴史]

開基は明治33年雄武外3村戸長役場の独立した日の明治33年7月1日とされている。漁業が唯一の産業であったが、国有未開地処分法による大規模な農業経営がはじまり入植者が入り込み、続いて森林資源が注目された。大正5年12月低気圧による高潮で、海岸通りの建物197戸、漁船251隻を流破される大災害に被災し、伸び続けていた村勢も沈滞したが、昭和9年9月雄武港の完成と並行して翌年、昭和10年9月には興浜南線が開通し経済的にも活況を呈した。昭和23年10月1日に町制が施行され現在に至る。平成12年に開基100周年を迎え、記念式典・記念行事を実施した。

[産業]

- 《 農業 》 町の農業は、土壌が重粘土質という立地条件の特殊性から、広大な土地面積の有利性を生かした酪農専業であり、土地基盤整備、酪農施設の整備、施設の高度化により経営の規模拡大を図り、安定経営の確立を目指している。
- 《 水産業 》 海岸線35kmと4漁港を有し、毛がに・サケ・ホタテを中心に漁業が営まれている。ホタテ漁場造成・稚貝放流・サケ・マス増殖など資源管理型漁業及び育てる漁業も行われている。
- 《 林業 》 町の74%が緑豊かな森林で、道有林が70%、町有林が5%、民有林が25%である。うち人工林は30%強である。各種造林、保育事業を導入し、森林が持つ多面的な機能に配慮しながら、森林の整備及び保全を進めている。
- 《 商業 》 人口減少による購買力の低下や消費流出などにより地元消費が伸び悩む中、プレミアム付商品券の発行などによる消費喚起や個人消費の拡大を図るとともに、小規模企業の経営安定化及び創業促進のため、小規模企業振興基本条例を制定し、施設整備費や新商品開発費などに対する助成を行うことにより、地域の活性化及び商工業の振興・発展に努めている。
- 《 工業 》 町の工業は、第一次産業と関連した「地場資源・地方資源」活用型工業であり、オホーツク海の豊富な水産資源を利用した水産加工業が中心となっている。さらに、高次加工品・特産品開発にも傾注し、地域内の資源を見直すなど多様化する消費者ニーズにあった研究を進めながら、地域経済の発展に努めている。

[文化・観光]

町はオホーツク海のほぼ中央に位置し、35kmに及ぶ海岸線は四季折々にその姿を変える。中でも町の沢木地区にある「日の出岬」は町の観光拠点として整備を進めてきたもので、キャンプ場や総ガラス張りの展望台「ラ・ルーナ」をはじめ、天然温泉露天風呂がある「オホーツク温泉ホテル日の出岬」など、オホーツクを一年通じて満喫できる観光スポットとなっており、多くの観光客が訪れている。

[イベント]

おうむ産業観光まつり

(6月最終
土・日曜日予定)

雄武町に夏の到来を感じさせる、町最大のイベントである。前夜祭には花火大会が催されるほか、本祭では地元海産物などの味覚が勢揃いする雄武物産即売会をはじめ、各種ステージショーや抽選会などが行われる。

雄武の宝「うまいもんまつり」

(9月最終日曜日予定)

見て、触って、味わってもらふことをコンセプトに、雄武町の”うまいもん”が勢揃いするイベントである。特産品即売会のほか、雄武の秋の味覚を堪能できる料理の提供、鮭のつかみ取りなどが行われる。

～まちの施策・計画等～

【第6期雄武町総合計画によるまちづくり】

町の最上位計画である「第6期雄武町総合計画（平成30年度～令和9年度）」の定める将来像「～郷土愛で築く～次世代へ躍進するまち・雄武」に向かって、「躍動感あふれる産業のまち・雄武」、「安心感の持てる福祉のまち・雄武」、「達成感から学ぶ教育のまち・雄武」、「快適感を満たす環境のまち・雄武」、「連帯感を高める協働のまち・雄武」の5つを目標として、町民が主役となったまちづくりを進めています。

～主な事業・取り組み等～

【小規模企業者創業支援事業】

近年、経営者の高齢化や後継者不足により町内の小規模企業者が減少傾向にあることから、町内で新たに創業する者に対し助成金を交付しています。

【雄武町オホーツク紋別空港利用促進助成事業】

オホーツク紋別空港の利用促進ならびに地域観光の振興と交流人口の拡大および移住定住施策の推進等、雄武町の発展に寄与することを目的に、雄武町民および雄武町内に宿泊する道外在住者に対して助成金を交付しています。

【雄武高等学校存続対策事業】

雄武高等学校を地域の学校として存続させるため、入学する生徒の保護者に対し、制服購入代金の助成や見学旅行に係る支援、町外生徒に対するバスの定期代等の補助等を行うとともに、大学や短大等に進学する卒業生に対し給付型の奨学金や就学費用の貸付（無利子）を行っています。

【勤怠管理システム、テレワークの導入】

働き方改革推進のため、勤怠管理システムを導入し、職員の勤務状況を正確に把握し、職場環境改善に取り組んでいます。また、テレワークの導入により、非常時においても行政機能を維持できる体制を整えています。

～まちのPR～

本町はオホーツク観光ラインの中間点として広域観光の重要な位置にあるとともに、オホーツク海を一望できる「日の出岬」や「ピヤシリ湿原」等、雄大な自然を堪能できる数多くの観光・交流施設を有しています。とりわけ「日の出岬」周辺は、天然温泉を有する「ホテル日の出岬」を拠点に、総ガラス張りのユニークな展望台「ラ・ルーナ」、キャンプ場、海浜公園など特色のある施設が整備されており、本町の観光拠点となっています。



雄武町公認キャラクター
いくほすじ子

おおぞらちょう
大空町



- [所在地] 〒099-2392
網走郡大空町女満別西3条4丁目2番地
[電話番号] 0152-74-2111
[FAX番号] 0152-74-2191
[ホームページ] <http://www.town.ozora.hokkaido.jp/>
[市町村コード] 015644
[開基年月日] 旧女満別町 明治23年
旧東藻琴村 明治39年

[市町村名の由来]

澄み切った大空、そしてその大空の下に広がる実り豊かな大地のもとで、住民が夢や希望を持ち、晴れ晴れした気持ちで暮らしていくことをめざすものとして命名された。

[市町村章の由来]

『OZORA』の英字頭文字「O」をベースに、澄み切った透明感のある大空、交流拠点となる空港と基幹産業である農業を青色と緑色の流線型で表し、「大空と大地の中で ふれあいと語らいで創る 感動のまち」を象徴している。

[歴史]

大空町は、旧女満別町と旧東藻琴村が合併したことにより誕生した町である。

旧女満別町は、明治23年にマッチ軸の木材栽培により人が居住したことを開拓の始まりとし、その後、鉄道開通により駅前を中心に市街地が形成されるなど人口が増加したことから大正10年網走町から分村、昭和26年に町制を施行した。

旧東藻琴村の始まりは、基線道路の開通を機に明治39年に開拓者が入植し、大正時代には団体入植による本格的な開拓が始まったことで集落形成が進み、昭和22年に網走町から分村して村制を施行した。

平成18年3月31日、互いに豊かな産業や文化を育ててきた両町村は、一つの町として手を取り合い「大空町」として生まれ変わった。

大空町は、互いの優れた特性を活かし、美しい自然と共生しながら、ふれあいと語らいによる感動のまちづくりを進めている。

[産業]

《農業》 農業は、本町の主産業でもあり、経営耕地面積12,910ha（2015センサス）と全町の約40%を占めている。主な作目は、米の作付けをはじめ、麦類、馬鈴薯、甜菜、豆類、野菜と多岐にわたっている。

畜産業では、乳用牛約5千頭、肉用牛約5千頭、豚約2千頭が飼養されている。その他、馬・羊なども飼養されている。

《水産業》 網走湖での内水面漁業が行われており、しじみ、わかさぎ、しらうおなどの漁が行われている。また、網走湖の漁業資源を保護・増殖するために、しじみの資源調査・水質環境調査事業を支援している。

《林業》 森林面積は13,261haであり、全町の約39%を占めている。カラマツ及びトドマツを主体とした植林を行っており、人工林の面積は8,533ha、人工林率は約64%（R2.10現在）である。森林所有者の負担軽減と優良森林資源確保のため、造林・下刈・除間伐事業を支援している。

《商業》 大空町内には卸売、小売業店が83店（平成26年経済センサスー基礎調査）ある。人口の減少と交通網の発達から、他市町商業地域への消費購買力の流出により、商店街への影響がみられるが、特産品の開発販売、プレミアム付商品券の販売、ポイントカード事業など地元消費の拡大を図る取組みが行われている。

《工業》 町内の製造業者は20事業所（平成26年経済センサスー基礎調査）あり、食料加工品、木材、家具など地場資源活用型の工業になっている。

[文化・観光]

天然記念物に指定されている「女満別湿生植物群落」や、青サギが「集団営巣地（コロニー）」を形成している網走湖女満別湖畔、標高1,000mで山頂から摩周岳・阿寒岳・知床連山・オホーツクの大海原などを展望することができる藻琴山を有するなど自然環境が豊かな地域である。

中でも、満開時には芝桜が100,000㎡という広大な斜面に咲き誇る「ひがしもこと芝桜公園」、網走湖・知床連山・阿寒岳、そして豊かな田園風景を一望できる「朝日ヶ丘公園」、ゆるやかな丘陵地に連なる畑が、季節ごとに美しい田園風景を描く「メルヘンの丘」、地元特産品等の販売や情報提供機能を持った道の駅「メルヘンの丘めまんべつ」と「ノンキーランドひがしもこと」、そして、新しい乳製品の開発・製造・体験・販売などが行われている「ひがしもこと乳酪館」などの多くの見所がある。

また、文化面では町民文化展や芸術祭の開催、教育文化合宿の場としてスポーツ合宿や音楽合宿を誘致するなど、地域文化の継承・創造、そして地域間の交流を推進し、教育文化活動の活性化を図っている。

[イベント]

ひがしもこと 芝ざくらまつり

(5月上旬～6月上旬)

芝桜の開花に合わせて5月上旬から5週にわたって繰り上げられる東藻琴地区最大のイベント。東藻琴を舞台に、歌謡ショーなど催し物が盛り沢山。花見を兼ねて道内外から大勢の観光客が訪れ、ピンク色に咲き誇る華やかさが、人々を魅了している。

めまんべつ 観光夏まつり

(8月上旬)

網走湖女満別湖畔を会場に開催される女満別地区の夏を彩る最大のイベント。水上花火大会や女性のためのローボート大会、北海道ドラゴンボート競技会など湖畔ならではのアトラクションが盛り沢山。湖畔キャンプ場でキャンプを楽しみながら、夏ならではの賑わいを楽しめる。

ノンキーランド ふるさとまつり

(8月最終日曜日)

東藻琴地区の夏を彩る「ノンキーランドふるさとまつり」。そのメインイベントは「ロール転がしどってん酷」。4人1チームで重さ400kg（女子は300kg）の牧草ロールを転がし、ゴールまでのタイムを競う。その他、野外バーベキューや特産品の格安販売もある。

もこと山ふきおろし マラソン大会

(10月下旬)

北海道でシーズン最後とも言える藻琴山のハイランド小清水展望台駐車場から下るこのマラソン大会は、道内外のアマチュアランナーの間でも人気のレースで、北海道スポーツ100選にも選ばれている。この大会は、文字通り藻琴山からふきおろす冷たい風や、時には雪の中で行われることもある。

～まちの施策・計画等～

大空町では平成28年度から令和7年度までの10年間を計画期間とする第2次大空町総合計画を策定しています。目指す将来像「夢を絆を笑顔で彩る大空町」を掲げ、その実現を目指すために「にぎわいひろがる産業のまちづくり」、「あたたかさあふれる福祉のまちづくり」、「いきがいはぐくむ学びのまちづくり」、「ゆたかさうるおう生活のまちづくり」及び「ふれあいつながる協働のまちづくり」という5つの基本目標を掲げ、各分野で様々な事業を行っています。

～主な事業・取り組み等～

【認定こども園整備・運営事業】

町立の幼稚園と保育園の機能を一体とした幼保一元型の認定こども園の整備を行っています。めまんべつ認定こども園は令和2年10月1日から開園、ひがしもこと認定こども園は令和3年10月1日の開園を目指し、整備が進められています。

【町立 大空高等学校開設】

道立の女満別高等学校と町立の東藻琴高等学校を発展的に統合し、新たに町立の『大空高等学校』として、令和3年4月1日より開校します。